

形物香合

交趾

『茶器名物図集』に「跣趾、安南、呂宋等皆東京にて、跣趾八則東京之船着キにて中天竺之内なりといへり」と述べているがこれは必ずしも産地を言い当てているわけでないが、交趾が単なる船積港であって、産地ではないことを察知していることになる。かつて呂宋の壺が、その産地を呂宋国と決めていたのであるが、これが実は南支で、呂宋は単に中継地にすぎないことを知るにょよんで、交趾もまた中継の貿易港名を取ったに過ぎないことが判明して来たのである。既述のごとく交趾「台牛」香合が、呉州にもまったく同型を見るにょよんで、両者が隣接することを知ったわけで、作風や釉薬を見ても安南・タイ・印度・比島などの産であることは否定され、中国南部産説が有力視されるに到った次第である。

年代についても確証は得られぬが、江戸初期の押小路焼（寛永元年開窯）に「狸」の写しがあることや、その他の諸般の状況を鑑みて、やはり寛永時代から輸入が始まり、「槐記」に頻出するように享保の頃には、その人氣が定着したのではないかと考察される。そして、その色彩や形容の変化に興味が集まり、この番付の作られる頃にはもっとも人氣が高く、東の最上段を独占するという結果を生じている。しかも、これが明治以降の評価にも大きな影響をおよぼしたのである。

形は動物・植物の諸種に取材され、それも色々な形式を取っていて、他の類より立体的で変化に富んでいる。しかも、彩色も華やかで、黄・萌黄（青とも緑ともいう）・紫・白檀（焼成後に金箔を貼りこれに透明の漆をかけたもの）の四種の施彩が単色、あるいは組合せで行われ、そして器種によって黄一色（惣黄という）が優先する場合と、二種以上の彩色が交錯する色絵が優先する場合とがあり、頭註にこれが付記されているのである。

また陶質にも二種あり、淡い卵殻色を帯びた、柔い胎土の類と、褐色がかかった堅緻な胎土の類とがあり、概して上位の物は前者、下位の物は後者に該当する。

染付

古染付といえば、日本人が中国景德鎮窯に茶道具として注文した水指や向付がまず頭に浮かぶのであるが、これとて何時どのような注文されたかは明確には知られていない。ただ、向付に見るように織部好が確実と思われるものが含まれていることから、織部在世中に近い時期の注文が予想されている。これに対して香合の場合はむしろ茶人好以前の中国本来の作品（肉池や練物入など）も含まれていると見られている。しかし萬曆や嘉靖年代まで上がるものは含まれておらず、（これらは別掲されている）いずれもやはり天啓時代を上限としており、以後清朝の時代の作もかなり含まれていると見られる。そして、時代の下がるものは明らかに日本注文と見られ、「隅田川」などはその典型的な作例といえることが出来る。

それでは、どこまでが注文以前かという点、これは仲々の難問で、研究家によつてはすべてを茶匠注文とみている人もある。

私見としては染付の調子から見て「辻堂」や「哥々鳥」の類を以前と見、「張甲牛」「拍子木」の類を以後と見るのであるが、確証は得られていない。要するに上位の極一部が注文以前であろうと想像する次第である。ただ、問題は同じ注文でも祥瑞とは自ら性質を異にしていることで、その判別は、造形や染付の絵柄・鮮明さなどによらねばならない。

形態は交趾に見られる程の変化はないが、四方・六角・入角・菱などを主流とするが、辻堂・桔梗・兜巾茄子・台布袋・海老・唄などという個別の造形のものも種々含まれていて結構変化に富んでいるのである。

青磁

すべて中国景德鎮窯の青磁であるが、これもいつまでが注文本品であるかは明確でない。ただいえることは、やはり明末・清初のものが多く、青磁としてはほとんどが七官の手にはいるわけで、やはり注文作もかなり含まれているであろうということが想像されるのである。

ただ「袋鼠」や「犬鷹」などのように砧手を思わせるような碧色のねっとり

した肌合いの類も見られ、釉調はさまざまである。

形容においても、この「袋鼠」や「犬鷹」のように、まったく同じ型かと思う程、類似しているものもあれば、「桃」や「一葉」のように一つずつ、少しずつ形を変えて作られているものも少なくないのである。また「木魚」「雁」「トキロヤ」などのように明らかに中国で香炉として作られたものの転用と見られるものもあり、これらは、かなり大小の差違のあることは否めない。その中から香合に程よい大きさのものが重宝されたということになる。

呉州

染付・祥瑞がすべて景德鎮窯であるのに対し、呉州は中国南部（福建省石碼窯説が有力）の貿易を目的とした民窯の産であると見られている。景德鎮の染付よりは生地の方が乳白色で、やや濁った感じのものもあり、殊に染付の色は景德鎮のものと違って黒味や褐色味を帯びていて、時折凝固状態を呈している場合も見られる。

形態としては「台牛」「菊蟹」のように交趾と土型を等しくするものもあれば、「松皮」や「銀杏」のように染付と形が共通しているものもある。また「有馬筆」のように遠州意匠を思わせるものもあって複雑な性格を有している。

一方赤絵のものも含まれていて、四方入角、赤玉が特に評判が高い。これらの年代も明末・清初が主で、茶人注文も少なくない。

祥瑞

染付と同じく景德鎮窯の産であるが、この方はすべて茶匠注文、あるいは五良大甫呉祥瑞の創意で茶道具として作られたものである。しかも同じ茶匠好といっても、特に作調が精妙で、染付の色、すなわち菁華の顔料の選定が厳密で、当然それだけで作品は上作ということになる。

また特筆されねばならぬのは、中でも明らかに小堀遠州直々の好みであると判定される幾種かのものである。例えば「鳥差瓢箪」は遠州デザインというだけでなく、枠内の鳥と鳥差の絵は松花堂の下絵と伝えられていることや、

瓜（豎・横とも）・豆男などは遠州侯の箱書、あるいは同家蔵帳所載などによって、侯の好みであることが実証されているのである。

勿論、遠州好以外にも傑作は幾つかあり、中でも「蜜柑」「瑠璃雀」「茄子」などは、それぞれに極めて優れた意匠と技巧を誇っており、人気も高いのである。なお、祥瑞の場合は箱書や蔵帳には染付と記されたものが多いので、当然内容によって、これらは区別されねばならない。

宋胡録

タイ北部のスワンカロークの産で、その名を「宋胡録」と宛字したものである。形は「柿」と「食籠」が番付に揚げられているが、雲州蔵帳では「九角」が著名である。柿・食籠とも茶人の呼称で、タイには柿の実はなく、前途のごとくマングスチンからの取材と思われる。食籠の方は「柿」に見られる蓋の甲の葉状の撮みがなく、この形では実際に食籠に用い得る程の大きいものが見れる。また宋胡録には鉢・茶碗に用いられているものもある。

宋胡録の場合は日本注文はなく、すべて自国の創作で、香合に用いられているものは練物の類を輸出する容器ではなかったかと思われる。東南アジア全般に広く輸出されたようで、比国、ジャワ他各地で発掘されている。年代は、西暦一二九三に始まり二百年程を盛期としているが、茶道具に採りあげられたのは江戸時代中期と見られる。但し、茶家では伝世の味わいのよいものが珍重されるのである。

その他

行司に和物漆器で茶匠三種（直斎好名取川・庸軒好回也・同標有梅）が挙げられ、さらに頭取に和陶七種（黄瀬戸根太・伊賀伽藍・志野宝珠・織部菊兎・同青分銅・仁清雁・乾山鎗梅）、勸進元に三種（呉州台牛・紅毛白雁・同菱）が中央欄を埋めている。内容は個々の説明にゆずるが、実に巧に当時人気の和物香合を挿入し、特殊唐物を加え、番付をより魅力あるものに仕上げている。

また東方末尾に世話人各種（唐物漆器類・和物陶磁器類など）、西方末尾に差

添二種（南蛮飯椀形・寧波染付向海老）を追加し、香合全般を見渡せるよう苦心が払われている。

いずれにしても、この番付一枚摺りの充実した編成の才智には改めて感心させられる次第である。

番付別紙

東方

東大関 色絵 交趾 大亀

東の大関、すなわち形物香合番付の大座にある交趾大亀は、形物香合の象徴といえよう。明治四十五年生島家入札に出た大亀がなんと九万円という高値で落札して藤田家に収まった話しは、人口に膾炙しているが、この事象がまた、形物香合の評価を確立した嚆矢であり、重ねて番付の存在価値をも立証したことになるのである。

番付の頭註に「色絵」とあり、すなわち甲の亀甲が各種の色に染め分けられていることを理想とし、その代表が生島家伝来品である。他に雲州家伝来品が同じく色絵として著名である。古写本にも「彩色もの稀なり 萌黄 紫 黄 白 だん」とあって、その貴重ぶりがわかる。惣萌黄のものは根津美術館蔵ほか数点知られており、色絵と同型で、やはりその堂々たる威容が賞揚されている。

東関脇 色絵 交趾 台牛

『茶道筌蹄』には「角牛」として「葉入角惣もへぎ 甲黄にして牛少し浮きあがる」と記されている。番付の頭註は「色絵」とあって中でも牛が黄色のものが理想とされているようである。また、上作のものには高台内に陽刻浮出しで「天」の字を見ることが出来る。この葉（四方）入角の造型は呉州にもあり、白無地のものは呉州台牛、あるいは、青磁台牛と呼ばれ、その型はこの交趾とまったく一致するもので、身、蓋を交換すると完全に出会うのである。このことはまた、交趾と呉州の産地の隣接を証明することにもなり、交趾が中国南部の産であることの実証材料ともなっている。色絵は二例が知られており、さら

に惣萌黄を見ることが出来るが、惣黄には未だ出会っていない。いずれにしても大亀に次ぐ交趾作としての評価は頗る高い。藤田家伝来、閑事庵宗信所持のものが知名であるが、北村美術館蔵のものは藤田家伝来のもと同配色で、同じく底に「天」の字がある。

東小結 惣黄 交趾 桃

頭註に「惣黄」とあるが、その遺例は数が少なく、岩崎家伝来のものや、金沢に伝来のものなど聞くが、実存は確かめられていない。伝存のものでは、馬越伝来の惣萌黄が著名で、益田鈍翁から同家へ譲渡にまつわる経緯が名器に話題を添えている。他に雲州家伝来で惣萌黄、葉紫が知られている。

東前頭 筆頭 惣黄 交趾 花喰鳥

「見返り鴨」ともいう。首を後ろへ捻って口に折枝をくわえた鳥ということとその名がある。鳥は鴨とまったく同形であることも注目される。惣黄を理想としているが、これも数が少なく、二例が知られているにすぎない。その一つは羽も黄で、今一つが羽根は白檀である。その他、惣萌黄二つ、惣紫が一つが知られており、いずれも羽根が白檀となっている。

東前頭 二枚目 惣黄 交趾 鹿

甲盛りの平丸形で、その甲にうずくまった鹿の浮紋があり、身の内側には剣先弁の並列紋となっている。

惣黄および甲の鹿の部分が黄色のものを黄鹿と呼び特に珍重される。他に紫、萌黄など数個が伝存し、その組合せになったものがある。

東前頭 三枚目 惣黄 交趾 菊蟹

黄弁の輪花合子形で、甲の平らな部分に蟹が浮彫されている。惣黄と頭註されているが実在は確かめられず、『茶道荃蹄』にも「外萌黄、蟹横にて浮模様あり」とのみ記されている。多くは惣青（萌黄）地に蟹が白檀のものが多い。

蟹の足の形に二、三種あるのは型が一つでないことを証している。また、呉州の菊蟹に同型があり、身と蓋と取り替えるとぴたり出合うことで、台牛同様、産地隣接説の有力な資料ともなっている。

東前頭 四枚目 惣黄 交趾 分銅亀

甲盛りの分銅形で、亀の頭が突出し甲は亀甲地紋となっている。惣黄の頭註があるが、身も蓋も黄のものの実在は確かめられず、萌黄地および紫地に甲のみ黄色のもの二点を確認出来ている。古記録に「黄薬高し、横に梅ヶ折有は高し百兩位、梅無しは七十両、青は三十五両」とある。他に惣青甲紫など数点が知られている。分銅は銭に通じ、富を呼ぶということで特に商家に喜ばれる。

東前頭 五枚目 色絵 交趾 中亀

大亀より寸法が小さく、甲の周辺が少し落ち込んだ形で、それだけ頭が上に持ち上がったような印象を受ける。頭註の「色絵」は二色以上の色の組合せになったものを喜ぶ意味であるが、中亀はもともと数量が少なく、多彩を誇るものは極めて稀で、惣萌黄に甲の中央部のみが白檀になったものなど、二、三点が知られているに過ぎない。

東前頭 六枚目 色絵 交趾 狸

『茶道荃蹄』に「狸の形にて、腹を抱いて紫・黄・もへぎの染分、尻に少しく黄なる処あり」と記されているが、その顔をよく見ると実は猿であることがよくわかる。しかし、全体の姿が、さながら狸が腹を抱えて座っているような印象を受けることで、早くよりその名が付けられており、愛嬌のある姿として人気が高い。色も多彩なものが多く、大概は同体の前面が萌黄で背面は萌黄または、黄、手足は黄または紫などと変化に富んでいる。胸の部分は土見になったものや、白釉のかけられたものが見られる。腹部には七宝紋があるものなどないものがある。顔は一色のものであるが、多く目より下を別色としてその表情を一層愛嬌のあるものになっている。尾も色分けされ、手書きが加えられている。数は最上段では、笠牛に次いで多い方であるが、それでも十指を数える程度かと思われる。

東前頭 七枚目 黄 交趾 小判蟹

小判形の合子で甲一杯に蟹が浮彫され、その中央の甲の部分が七宝紋となっており、大概色を違えてある。頭註に「黄」とあることは惣黄でも、七宝部分が色違いになったものも同等と見られているからと思われる。黄地に萌黄色七

宝のものが一点知られており、他に惣黄、惣萌黄、惣紫など、数点が伝存している。

東前頭 八枚目 惣黄 交趾 笠牛

臥牛を大振りの小判形に意匠したもので、背の中央に笠を配し、牧童を連想させたところに却って妙趣を感じさせられる。頭註に「惣黄」とあるが笠まですべて黄というものは稀で、唯一の伝存が聞伝えられている。これに対し黄地で笠のみが萌黄のものは四点知られており、そのうち二点まで笠の釉が胴に流れ込んでいるが、却って風情を添えている。その数量は最上段中ではもっとも多いようで、色絵も様々に組み合わせられていて興味深い。また本来は身と蓋は同色であるべきであるが、取替わったことで興趣を増したのもいくつか見られるのである。

東前頭 九枚目 色絵 交趾 大鴨

鴨に大・中・小あり、そのうち大振りなものを指し、数ももっとも少なく、それだけ珍重されている。ことに惣黄は稀で、羽根のみ白檀であるがこれに準ずるものも見られる。なお、大・中・小の三段階に整然と区分されるものではないようで、中間のものも見られ、羽根にもきざみのあるものもないものが見られる。また胸毛もあるものとなないものがある。

東前頭 十枚目 黄 交趾 大獅子

臥居する獅子を意匠したもので大振りのものを「大獅子」、小振りのものを「持遊獅子」と呼称している。それも数が少なく、惣黄二点、その他三、四点を知るのである。色絵では蓋が萌黄地に腰の辺りが紫、そして身が黄のものや、惣萌黄、惣紫のものなどが知られている。

東前頭 十一枚目 色絵 交趾 金花鳥

甲盛の合子形で、甲に鳳凰が二羽向かい合い、その間を牡丹紋が埋めている。蓋中央にこれまた牡丹らしき花を意匠した浮紋があり、この部分だけ色を替えているものが多い。なお、この甲の盛りあがりにも二通りあり、ふっくらと大きく張っている手と、藤の実風にやや扁平に感じる手とがある。ただし、彫りの工合や土釉の味わいなどはまったく同類と見られる。手がさがあり、呼称も

美しいことから評価が高い。なお、三井家伝来のものは萌黄地に鳳凰が紫、甲中央の牡丹が黄となっている。他には萌黄地に花白檀のものが二、三点知られる。

東二段目 一位 胴合梅二鶯 青磁 開扇

青磁の開扇には、胴合と棧蓋のものとあり、頭註通り胴合のものが上位に位置している。胴合とは、印籠蓋、ヤロウ（葉籠）蓋ともいい身の内側に立ち上がりがあつて、これを覆うように蓋がかぶさるものをいう。「梅二鶯」と頭註にあるのは甲に沈紋でその絵が描かれているからで、いずれにしても初釜などには最適の香合ということになる。

東二段目 二位 青磁 木瓜

やはり胴合で、上から見た形が木瓜形である。その甲に大鳥の沈紋があつて、この鳥を鶴に見立てて、「木瓜鶴」とも呼ばれている。

東二段目 三位 青磁 一輪菊

その実例が定かではなく、形容も不明である。交趾にも「一輪菊」があり、この方は球形に近い合子形をしているが、青磁の場合は甲が扁平と見られる。

東二段目 四位 青磁 犬鷹

青磁の桃形香合の上に犬らしき動物を貼付けて意匠したもので、形物香合中異色の作である。恐らくは鷹狩に因んだ命題と思われ、これを桃の上に配したところも興味深い。青磁は七官の手ではあるがありが良好で、砧青磁に似た肌合いを呈している。数が大変少なく、それだけに珍重の度も高い。なお、この主題は中国においても「鷹配狗」として知名であると聞く。

東二段目 五位 青磁 鷹全

前項の犬鷹と同工異曲の作で、同じく桃形の上に同形の鳥が対峙して貼付けられている。犬鷹以上に数は少なく、今までに一点を確認するのみである。

東二段目 六位 小 青磁 木魚

中国で香炉に作られたもののようで、寸法に大小がある。香合としては小さい方が好ましいことから、頭註に「小」と記されている。どの位から小とするかは微妙であるが、常識として七、八cm以下と見るべきであろう。形も大降り

もののほぼ一定であるが、小振りなものには変形も見られる。番付にして大と小は二十枚の差がつけられている。

東二段目 七位 **青磁 袋鼠**

青磁として二段目の位置にあるが、その珍重ぶりは最上段と同等の扱いを受けている。これは袋鼠の呼称が大黒に通じ、富に結びつくことや、犬鷹同様七官の手でありながら砧を思わせるような薬肌が魅力ともなっている。この袋鼠の名称はもともと柘榴に栗鼠であったものを茶人が風流に呼び替えたものと思われ、一層その人気を高めたことと思われる。今日数点の優作を伝えているが、かつて大正十二年五月、早川家入札に出て、四万八千九百円という高値（同入札第三位）で落札したものや、本願寺伝来のもの、神戸某家のものなどが代表してゐる。

東二段目 八位 **サン蓋 青磁 開扇**

同形の「胴合」から七枚後にこの「サン蓋」がある。胴合とほぼ同形で、甲の模様も共通しているが、折枝だけで鳥の居るものは稀なようである。枝も梅と判別出来るものは少ない。

東二段目 九位 **惣黄 交趾 大牡丹**

甲がやや盛りあがった平丸形で、その甲に牡丹の浮紋がある。大小あって小の方には四段目二位に位置している。惣黄で花の部分のみが白檀のもの、身蓋とも黄であるから惣黄の条件を叶えている。他に花は白檀で惣青のものもある。

東二段目 十位 **黄フン 交趾 柘榴**

上位にある交趾としては比較的数量の多い類であるが、その割りには人気が高い。造形的面白さに加えて色の配分の多様性がこれを助長しているようである。頭註に「黄フン」とあるのは黄色のフンドシの略で、別称「黄襷」とも呼ばれている。要するに合子の胴を三つの窓に区切っている襷の部分が黄色であるということである。その他紫フン、黄馬、同紫馬などがあり、地は青が多い。底に「成」の字が見られる。

東二段目 十一位 **惣黄 交趾 丸竜**

甲の少し盛りあがった平丸形で、その甲に一疋の龍が水中に丸く蟠まってい

る意匠である。大小あり、甲の図柄にも差異がある。惣黄もあるが惣萌黄で甲の絵の部分は紫地に龍が部分的に黄に塗り分けられている。京都美術倶楽部青年会刊『形物香合図鑑』（以後略して『京美図鑑』と呼ぶ）には惣黄で龍の頭が紫、胴が青の大振りのものが掲載されている。

東二段目 十二位 惣黄 交趾 大阿こだ

身の方が阿古陀状に彫深く区分され、姥口状に抱えた口に甲盛の蓋が添っている。阿古陀は瓜を意味するのであるが、大きさは大・中・小があって、中は三段目、小は五段目と位をさげている。蓋の意匠もまちまちで、形状も少しずつ違ったりしている。色は惣黄が理想であるが稀で、身のみ黄や、惣萌黄、花白檀のものが多く見られる。惣紫も伝えられている。なお、別に「南瓜」という項目もあり、その区別が判然としない。

東二段目 十三位 惣黄 交趾 鴨

上位に大鴨、下位に小鴨があることから、この「鴨」は中鴨ということになる。ただしこの寸法の差異はやや曖昧なものがあり、殊に箱書はまちまちで、大鴨にただ「鴨」と記されたり、中鴨に「大鴨」と書かれたものもある。数は大が稀で、中、小は割合数が多い。色は頭註のごとく惣黄が最上というわけであるが稀少で、萌黄、紫等が多い。羽根は大鴨同様ほとんどが白檀で、胸毛はあるものとなないものが見られ、ある方が喜ばれる。

東二段目 十四位 黄 交趾 額梅

長角、葉入の蓋物の甲に、額縁のごとき枠があって、その中に浮紋で鶯らしき鳥の止まった梅の枝が横に伸びている。色は頭註のごとく「黄」が喜ばれるが数は少ない。『京美図鑑』に黄地額面青と青地額面黄が掲載されている。なお、別に「角梅」もあるが、この方は四方入角で、浮紋も同図柄ながら線が細く、絵も繊細である。

東二段目 十五位 色絵 交趾 銭亀

小形の亀に「銭亀」と名づけたもので、すでに『茶道荃蹄』にこの題が挙げられている。「甲白檀、身もへきと黄と両様、頭左へ見かへると真すぐとあり」と記されている。この記述にある頭の見返る方は番付では四段目四位にあって

頭註に「ウシロムキ白檀」とあって別に位置付けられている。小形を銭で表現した理由はすでに本物の亀にその例があったからと思われるが、茶道具としては富とも結びつくとして喜ばれており、比較的上位に置かれたものと思われる。鴻池伝来で同家における利休百会の茶会に用いられたことが証されている。また『香合真図』元の巻には前向きの絵図があつてこれに「甲白檀有、足身二有」の註記が加えられている。さらに元の巻には後ろ向きの銭亀が別に図示されている。

東二段目 十六位 ウハキ 青磁 鞠挟

恐らく染付の「鞠挟」と同様、六角の各面が内に反った形ではないかと思われるが、今のところ実例が挙げられていない。

東二段目 十七位 青磁 蜜柑

厚手で貫入の多い七官手の作で、胴にわずかに豎筋が見られる。共蓋で、蓋の上面には葉の浮紋が見られる。この形式は水指にも見られるのである。

東二段目 十八位 胴合サン蓋毛有 青磁 六角

金森得水別巻『形物香合真図』（以後『香合真図』と呼ぶ）によると享の巻に「六角さんぶた」とあって図が描き込まれている。これによると正六角の平筒形で、高台を有し、棧蓋の甲には数枚の葉をつけた牡丹が陰刻されている。現在現物が見当たらないため、これを資料とするに過ぎない。

東二段目 十九位 青磁 菱

菱形、胴合で、甲に簡単な花紋が線彫されている。また、同類に大振りで棧蓋になったものもあり、この方は甲が素紋となっている。

東二段目 二十位 青磁 分銅

分銅の棧蓋で、甲には浮模様が見られる。小振りで、姿が富貴に結びつき、また雅味のあることで珍重されている。

東二段目 二十一位 青磁 田楽箱

長角、棧蓋の香合である。『香合真図』には同図があつて単に「長角さん蓋」とのみあることから、この田楽箱は番付作成のときに恐らく命名されたものであるうと思われ、それ故にこそこの単純な造形が忽ち風流味満点の香合に返信

したわけで、このあたりにも香合番付の効用の一面がまざまざと見られるように思われる。

東三段目 一位 青磁 菊伽藍

伽藍座の上面に菊花の文様があるものと見られるが、該当する作品が判明していない。

東三段目 二位 荒磯・水牛其外色々模様有 胴合サン蓋二手有 青磁 角

文字通り真四角な切餅のような形で、註釈にあるように胴合と棧蓋とがある。甲の絵も頭註のように荒磯・水牛の他梅などの浮紋があり、また、無紋のものもある。変形して甲に盛りあがりのあるものも見られる。

東三段目 三位 青磁 数珠操 布袋

『香合真図』の享の巻に図示があり、真上からのものだけに形は判然としなが、恐らく一文字（大根切）の胴合であろうと思われる。甲には沈紋があり、周囲が雷紋で、その中に数珠を持った布袋が座っている。

東三段目 四位 青磁 柿

扁平な柿形をなし、甲に撮みと葉が浮出している。もっとも『香合真図』の方ではかなりつんぼり高い柿が図示しており、二種あるのかも知れない。

東三段目 五位 大 青磁 木魚

二段目六位に小の木魚が挙げられているが、木魚の場合は他の香合と違ってむしろ小を上位に置いている。これは決して作調の優劣ではなく、茶席に適合した寸法によるもので、木魚の場合はもともと香炉だけに大はかなり大きいものまで見ることが出来る。なお、左右の龍頭が口を寄せ合った中央に玉を擁しているが、大には必ずこれがあり、その部分が土見になっているものもある。

東三段目 六位 色絵 交趾 櫻鯉

小ぢんまりとした合子形で、甲の中央に鯉らしき魚と、その周辺に花紋が浮彫になっており、さらにその周囲に細かいルイザ紋が巡っている。胴以下のすばまりも節状をなし、まことに個性的な意匠で、その命名とともに春の香合として趣が深い。頭註に色絵とあり、須磨藤田家伝来のものは、身が黄、甲が萌黄地に白檀でその条件を満たしている。『京美図鑑』には、惣黄、甲白檀が掲載

されている。

東三段目 七位 惣黄 交趾 荒磯

その意匠の卓拔さから、櫻鯉と同じくこの位置にありながらその人気は高い。頭註の惣黄では、鯉が白檀のものが鑑賞効果を高め喜ばれている。また色がまったく入らない純白のものもある。このように交趾では時折全然色の施されていないものがあり、白呉州と区別されねばならない。『京美図鑑』には惣萌黄、鯉白檀が二点掲載されている。

東三段目 八位 惣黄 持遊 交趾 獅子

小判形の合子に、蓋は獅子、身には剣先弁を浮彫しているが、その意匠は大獅子と軌を一にしている。この類を持遊獅子と呼んでいるが『香合真図』では手遊獅子とあり、いずれも大獅子より小振りであることが、銘の由来となっている。惣黄で随流斎の書付のものがあり、香雪美術館にも惣黄があり、『京美図鑑』には惣黄で尾の部分のみ萌黄のものが掲載されている。

東三段目 九位 色絵 交趾 飛竜

「三級浪高くして魚竜と化す」の故事に因んだ意匠で、これを飛竜と呼称している。すなわち鯉が三段の瀧を登るうちに、すでに頭部のみが竜と化しているわけで、出世や開運に結びつけて愛玩されるのである。色絵を理想とし、必ず竜の頭の部分は白檀に塗られている。萌黄地に背筋が入り、頭部が白檀となっているものや、黄地萌黄筋、頭部が白檀のものもある。

東三段目 十位 惣黄 交趾 路臺

路臺はその形状から来た命名で、小振りでもあり、当を得ているといえよう。蓋は鱗形を円錐状に積み重ね、頂上が小宝珠をなしている。二形あるようでひとつは鱗の刻みが深く傾斜が直線的であり、もうひとつは刻みが浅く丸味を帯びている。『京美図鑑』には惣黄で宝珠が白檀のものが見られる。

東三段目 十一位 色絵 交趾 麒麟

平丸形の甲に雲と火焰を座踞する麒麟の浮紋が見られる。平丸の形容は荒磯と軌を一にする。ふくらみのある平丸形である。色絵を最上としているが数は少なく、惣黄で麒麟が萌黄のものや、惣萌黄で麒麟のみ黄のものが知られる。

東三段目 十二位 色絵 交趾 玉取獅子

平丸形の甲に玉取獅子の浮紋があり、身には蓮の浮紋がある。頭註に「色絵」とあり益田家伝来に惣萌黄で獅子の頭と玉が白檀で獅子の胴以下が黄となったものがある。

東三段目 十三位 色絵 交趾 烏帽子鳥

『茶道荃蹄』に「鴨の形の様にて大ぶり、形えぼしに似たり、もへぎ羽根白だん」と記され、『京美図鑑』には記録通りの品が掲載され、これにはさらに後部の羽根に金筋が加彩されている。鴨の首が振り加反っており、頭の頂上が白檀となっている。

東三段目 十四位 色絵 交趾 嬰子鳥

「音呼」とも書き、その鳥がインコに似ていることでつけられた呼称である。頭註に色絵とあるが、「惣萌黄、羽根白檀」、「身紫、蓋萌黄、羽根白檀」、「身萌黄、蓋白檀」などがある。

東三段目 十五位 色絵 交趾 捻阿こた

あこだの胴筋が捻っていることでその名がある。二種あるようでやや背の高い、捻じり目の細いものと、平で捻じり、目の荒いものとがある。甲の蓋の部分は前者が小円を中心に龍がこれを取り巻き、後者の方は菊花にさらに花卉がこれを取り巻いている。色絵を上とするが、惣萌黄に蓋の部分が黄と紫に色分けされているものや、身萌黄、蓋黄のものが知られている。

東三段目 十六位 色絵 交趾 袈裟

落臺によく似た形で、相違点は鱗の細かいこと、甲が宝珠形の曲線をなしており、頂上が寄花のようになって尖っていることなのである。色絵と頭註にあるが色絵は見当たらず、惣萌黄、惣黄などが知られている。

東三段目 十七位 惣黄 交趾 中阿こた

文字通りあこだ形の中で、大に比べると大分小振りとなる。惣黄を上とするが、「身萌黄、蓋黄」、「身萌黄、蓋白檀」などがある。

東三段目 十八位 色絵 交趾 火焰馬

やや肩の張った平丸形で、蓋は上部の円窓内に頭に火焰を伴った飛馬が波上

を走り、その周囲には、菱目に卍をはめ込んだ繁紋を地紋とし菱木瓜の窓抜きが見られる。身の方は七宝に紐を伴った図柄が浮紋されている。頭註に色絵とあり惣萌黄地に黄馬、惣萌黄地に円窓内白檀などが知られる。後に出る福、禄、寿などと同類と見られるが、その図案に人気がある。

東三段目 十九位 大小有 青磁 雁

雁らしい鳥の水に浮く姿を意匠したもので、首は通常振り返っているが、『茶器名物図集』には前向きの図が掲げられている。また『京美図鑑』には後ろ向きで背のあたりで小さな玉を啄んでいる姿のものが掲載されている。寸法は大小あるが、概して大振りで、羽根には細かい羽脈の沈線が刻まれている。

東三段目 二十位 大小有 青磁 酒會

酒會は酒を容れる器の意で、もともと本当に酒を容れたものから、同じ形式で次第に小さいものが造られ、中寸のものは替茶器に、さらに小振りなものが香合に用いられたわけである。意匠も少しずつ違っており、蓋も盛り蓋、蓮葉蓋、一文字蓋などがあり、摘みのあるものとなないものがある。胴も無地の他縞、蓮弁、捻筋（捻酒会という）などが見られ、稀に飛青磁も見られる。また別に梅花酒会と呼ばれるものもあり、不昧侯が「のりすり桶」と愛称されたものなども知られている。

東三段目 二十一位 青磁 蘭鉢

実例が見当たらず、『茶道荃蹄』『香合真図』『茶器名物図集』のいずれにも記述・図示が見られない。『京美図鑑』でも「不詳」としている。

東三段目 二十二位 大小有 青磁 長角

文字通り横に長い角形の香合であるが、大小有るとともに、少しずつ形を異にしている。いずれも棧蓋で、蓋の甲が一文字に平面のものと盛りあがっているものとがり、無紋を通常としている。

東三段目 二十三位 大小有 青磁 寸切

俗にいう大根切形で、蓋は棧蓋を通常としている。無紋で沈筋紋とがあり、『京美図鑑』では甲が兎絵のものとが掲載されている。

東四段目 一位 色絵 交趾 木瓜龍

木瓜形の蓋の甲に、双龍紋があることでその名がある。蓋はやロウ蓋を約束とし、龍の紋は唐草下絵の上に浮紋されており、龍の部分のみが土見になっている。同形で龍のいない、唐草だけのものも見られる。色は頭註には色絵を挙げているが稀なようで『京美図鑑』でも、惣萌黄二点が掲載されている。そのうち一点は土見の双龍があり、一点は唐草のみである。

東四段目 二位 色絵 交趾 小牡丹

大牡丹と同形で、これを小振りにしたもの。甲がやや盛りあがり、これに蔓を地紋として大きく牡丹の花一輪が浮紋されている。色絵を理想としており、「萌黄地、花紫、身黄」のものや「惣萌黄、花白檀」のものが知られる。

東四段目 三位 色絵 交趾 角阿こた

角形のおこだ（瓜）ということであるが、実物には出合わず、その形容は明らかではない。

東四段目 四位 ウシロムキ白檀 交趾 銭亀

東二段目十五位の銭亀と同形で、亀の首が後ろ向いているだけの違いである。陶質も同質でありなぜこれだけの位置の違いとなったかは不明であるが、銭につながる故に、戻ることを忌んだのかも知れない。しかし今日ではあまり問題とはならないと思われる。甲がすべて白檀で、身が黄、身蓋とも内側には青の水釉がかけられているものがある。『香合真図』には銭亀としてこの後ろ向きが図示されている。

東四段目 五位 色絵 交趾 小鴨

大鴨（最上段前頭九枚目）、鴨（二段目十三位）に対しもっとも小さい鴨を指している。却って数は少なく、『京美図鑑』に惣黄に羽根白檀のものが一点掲載されている。

東四段目 六位 色絵 交趾 木菟

『香合真図』の利の巻に「みつつく」として記載されているが、実物に出合ったことがない。同図によると鴨の頭部がそのまま木菟になったような形で、色絵になっている。

東四段目 七位 色絵 交趾 角梅

四方入角の上下で少しすばんだ形で、蓋の甲に梅枝に鳥の絵が陽刻で現されていることで、その名がある。身、蓋とも側面にも陽刻があり、菊花、靈芝紋などが見られる。額梅との区別が難しく、一応は額梅を長角、角梅を四方としているが、古写本に後者を描いて「額梅」としているものもあり、問題を複雑にしている。『京美図鑑』では四方で、甲白檀、窓面が黄の紫縁のものが採りあげられている。

東四段目 八位 色絵 交趾 平柿

あこだとの判別つき難く、『京美図鑑』では八房のあこだ形のものに柿の蒂様の蓋のついたものを掲載しているが、確実とはいえないようである。『茶器名物図集』『香合真図』には図示はない。

東四段目 九位 色絵 交趾 小判龍

大形の小判形で、蓋の甲に双龍が大きく浮紋されている。色絵がいずれにかにあると思われるが、惣黄のものや『京美図鑑』のものも惣黄と惣萌黄である。

東四段目 十位 色絵 交趾 菊梅

二種、あるいは三種の型が想定される。ひとつは蓋の甲が菊花弁を呈し、平丸形の甲がやや凹んだ形のもので、小判形で蓋の甲に梅花の枝が浮紋されている類とがある。また『京美図鑑』のものは、菊蟹と同じような型の、蓋の甲に梅の折枝の絵が浮紋されている。『香合真図』には利の巻にこれとよく似た型が図示されている。

東四段目 十一位 祥瑞 角橋杭

祥瑞では西で上位に「蜜柑」「横瓜」「立瓜」「鳥差瓢箪」「褶扇」「拍子木」「茄子」の七種が挙げられていて、「角橋杭」はこれに次いでいるわけで、以下十一種すべて東に配置されている。この順位には諸要素が含まれているが、概していえることは祥瑞中遠州直々の好みと思われるものが上位にあることである。また祥瑞そのものが、市場の人気の割りに下位に列していることは、注文品であることが歴然としているためと思われる。

角橋杭は『茶道荃蹄』に「染付の橋杭同様にてヨウ入 上にツマミ有 なき

ものあり、綸子形おりもんもよう書分け」とあり、染付との違いは特にその文様にあることがわかる。撮み付のものは角が丸味を見せているのに対し、撮みなしのものは角張っている。

東四段目 十二位 祥瑞 具足櫃

『香合真図』利の巻に染付「具足櫃」が図示されているが、祥瑞は記載されていない。染付のものは方形の深いヤロウ蓋で、折枝や樹草紋、あるいは雲、舟人物などの文様が見られるが、これらは祥瑞と趣を異にしている。ただし、番付には染付具足櫃は項目がないので、もし祥瑞にその例を見ないとすればあるいは祥瑞を染付に改めるべきかも知れない。

東四段目 十三位 祥瑞 瑠璃雀

祥瑞としてのみでなく、その造形と釉色で香合全般としても人気の高い種類である。『茶道荃蹄』には「惣瑠璃にて羽根少し出て、口の穴通る」とあり、『香合真図』にもこれが図示されている。形はほぼ一定しているが尾羽根は一枚ずつ貼り付けられており個々の違いが見られる。伊達家伝来のものは胴と羽根の部分点を点で現したのも見られる。なお、雲州蔵帳に「翠雀」とあるのはこの種と思われる。

東四段目 十四位 祥瑞 枕

中央が溝になっている二つ枕と、扁平なただの枕とがある。図柄もさまざまで、花鳥、蔓草などが全体を覆うものや、区別して種々の祥瑞模様を配列したものなどが見られる。また祥瑞模様の中に菱窓を開けて、これに山水図を描いたものも見られる。

東四段目 十五位 色絵 交趾 布袋

身は丸形で木瓜形の凹みを取り巻き、蓋の方に布袋の座する姿を型抜きしている。布袋の頭と腹と手の部分は土肉色で、衣には彩釉を施している。『香合真図』元の巻に図示されている。『京美図鑑』にも一例が挙げられている。また『茶道荃蹄』には「衣黒飛色」と説明があるがその意は解きたい。

東四段目 十六位 色絵 交趾 南瓜

『香合真図』元の巻を見ると、あこだとよく似ているが、襷が細かく裾がや

やすぼんでいる。ただその襷の荒いものにも「南瓜」と箱書したものがある由で、どのあたりを境とするか疑問があり、さらに柿との区別にも判然としないものがある。

東四段目 十七位 色絵 交趾 具足櫃

四方入角で、やや裾すぼみになり、口は四方でこれも入角となっている。胴の四方と蓋に浮紋があり色絵を上としている。胴黄、蓋白檀のものがある。

東四段目 十八位 色絵 交趾 紅猪口丸竜

化粧の紅皿の蓋付を連想するのであるが、これを紅猪口と呼んだものである。丸龍は蓋の甲に丸龍が浮紋され、中央が三重輪となって玉取龍の玉を仮想したものと思われる。やはり色絵を上としている。

東四段目 十九位 色絵 交趾 蓮

紅猪口丸龍とよく似た形で、甲に蓮の浮紋があることでその名がある。地紋が青海波になっているものも見られる。

東四段目 二十位 色絵 交趾 禿菊

輪花の合子形で、小振りゆえに禿菊と名付けられている。輪花のひだは細かく、これを菊に譬えたわけであるが、いかにも愛玩の小器の感がある。甲には靈芝の浮紋が見られる。色絵を上とするがその例は少ないようである。

東四段目 二十一位 菰トモ云 小 交趾 嬰子鳥

三段目に嬰子鳥が挙げられているが、その小振りのものをいう。菰の字は正しくは「をぎ」で荻の十分に成長したものをいうのであるが、これは誤用で雀の意と思われる。惣萌黄に白檀羽根を好例としている。

東四段目 二十二位 色絵 交趾 天川

古書、写本にも記述、図示を得ず、その形容は不明である。

東四段目 二十三位 色絵 交趾 竹ノ節

身の胴に竹節が二本程巡っており、その名がある。蓋は口径一杯にかかり、甲が盛りあがっている。甲にはあこだの蓋に見られる環状の靈芝紋が浮紋されている。

東四段目 二十四位 福寿海ト文字有 交趾 橘

平丸形で蓋の中央円窓に橘と見られる浮紋があり、その周囲は八つに区切られて、寿山福海の四つの文字と、六弁の花紋が交互に浮紋されている。後出の福・禄・寿文字と形式、陶質を共通している。色絵を上とし、萌黄字に橘の部分が黄のものが知られる。『京美図鑑』には萌黄地に橘が白檀のものが掲載されている。

東四段目 二十五位 色絵 交趾 一輪菊

小振りの鞠形で蓋は中央が薬を現し、周囲が二重の輪花垂弁となっている。身もまた、菊輪花をなしている。色絵を上としており『京美図鑑』では、蓋黄、身萌黄が掲載されている。

東四段目 二十六位 色絵 交趾 柚

形容不明である。

東五段目 一位 吳州 地紙牛

扇の地紙形の甲に、臥牛が描かれている。四隅には草があしらわれ、牛の背の上のあたりには二匹の昆虫のような文様が景を添えており、身蓋の合口のところそれぞれ横線が一本ずつ引かれている。牛は水牛で台牛のそれと共通したものが見られる。

東五段目 二位 色絵 大小有 交趾 福之字

平丸形で、蓋の中央円窓の部分に福の字が浮紋され、周囲は七宝紋（これはいろいろに変わる）が巡り、さらにその外巻を細かい点線が三重に囲っている。それが身の方にも連続し、同じく三重に巡っている。色絵を上とするが、萌黄地に文字の部分のみ色替わりのものが多い。大小とあるが大は少なく、小の硬い手が多い。

東五段目 三位 色絵 大小有 交趾 壽之字

前項の福之字、後項の禄の字と形式を一にするものであるが、福・禄はほとんどが堅地のものであるのに対し、寿の字には柔地でやや大振りのものを見ることが出来る。身蓋の内側を見ると前項・後項とはあきらかに土質の違うことがわかる。

東五段目 四位 色絵 大小有 交趾 禄之字

前二項と共通しているが寿の字に見られる柔い手は稀なようである。福・禄・寿とも硬い手の外周の文様は点線の重圏で共通しているが、内周の方は数種あり、八卦紋が用いられているものもある。

東五段目 五位 祥瑞 捻

三方に甲から胴へかけて捻の切込みが見られるのであるが、原形に三種ある。すなわち寸切形で撮みのあるものとないの二種、そしてもう一種は平丸形で文様は織紋、唐草紋など、様々である。

東五段目 六位 祥瑞 吉之字立瓜

立瓜の形の一種に胴に豎襷がなく、撮みの座に帯のある形のものが見られるが、この種の蓋の側面に吉の字のあるものをいう。吉祥を尊ぶ祥瑞らしい意匠で、同系のものに吉之字茶器がある。通常蓋は織紋地に前後に吉の字が白抜きにされ、身の方は唐草紋が多い。なお、同形同種で玉の字も見られる。また撮みは蔓の端の他、小宝珠形のものも見られ、いずれも先端が藍溜になっている。

東五段目 七位 祥瑞 豆獅子

襷のある鞠形の蓋の頂上に獅子の撮みのあるものをいう。次の豆男と形式を共通しており、獅子が人物に変わるだけである。襷は十数条に別れ、それぞれに祥瑞紋が書詰められている。なお、襷に凹凸のないものがあるが、あるものを上位としている。

東五段目 八位 祥瑞 豆男

豆獅子と同形で、小人物の立姿（座するもあり）が蓋の頂上に見られ、呉州の有馬筆の意匠とも共通している。この形は遠州好と伝えられておりいずれにしてもいかにも日本人好みらしい意匠ということが出来よう。なお、同種の形外に摘みが豆象となっているものも見られる。

東五段目 九位 祥瑞 寸切

円筒を輪切りにした形で、俗に大根切とも呼ばれている。比較的数が少なく、重ね輪違いに花鳥紋で、『京美図鑑』には輪紋を伴わない花鳥紋のものが掲載されている。

東五段目 十位 祥瑞 筋兜

『茶道荃蹄』に「下丸薄平たく、蓋兜の形に似たる也、遠州輪違三ツ有」とあり、これによれば、七宝透しのあるものを本来としているが、そのなくものも少なくない。意匠も様々であるが、原則として、記述のごとく蓋が兜形に盛りあがっているのに対し、身の方は平ら目で丸くふくらんでいる。蓋は六面をなしているのであるが、その縦筋は盛りあがっているものと、いないものがあり、盛りあがっていないものでも図柄は区切られているものが多い。七宝の透しのあるものは織紋または染付の塗潰し（藍溜という）の面すなわち六面の一杵飛びに三ヶ所打ち抜かれている。文様は実に千差万別で、織紋、花鳥紋の他にも山水や宝尽し、扇面などもあり、輪違い紋も三層重ねのものが見られる。撮みの形もまちまちであるが、原則としては、瓜の蔓形と平宝珠形を基本としている。

東五段目 十一位 祥瑞 瑠璃扇

『茶道荃蹄』に「扇の地紙骨半分あり、地紋の上へりを懸けたるもの也、青海のもやうあり」と記述されている。すなわち、かぶせ蓋（ヤロウ）で全開扇と半開扇があるようである。甲の模様は通常は地紙の部分が祥瑞の織紋で、これが瑠璃釉で覆われ、側面もまた、同様である。『京美図鑑』にはこの他、梅紋の半開扇が図示されている。

東五段目 十二位 大小有 呉州 食籠

文字通り食籠形であるが、定形はないようで、四角、八角、丸などがあり、文様も一定せず、甲に玉取獅子、蟹などの絵があり、側面には宝尽し、草花紋などが面毎に配置されている。

東五段目 十三位 色絵 交趾 小あこた

あこたのうちもっとも小さい寸法のものをいう。房の数も少なく、襷が荒く取られている。『京美図鑑』には惣萌黄で、柿の蒂形の白檀蓋のものが掲載されている。

東五段目 十四位 色絵 交趾 靈芝

甲に靈芝の浮紋があることでその名がある。形は四方棧蓋で、甲にのみ模様

があり、側面は無紋である。『京美図鑑』に惣萌黄、甲白檀のものが一点採録されている。

東五段目 十五位 色絵 交趾 食籠

二種のものを伝えている。すなわち、竹の節と同工のもので裾の方ですぼんだものと、八角盛蓋で唐物の漆器に見られる食籠に似た形のものであり、これには摘みが付く。前者は小振りであるが後者は大振りである。前者の方は甲の中央が菊花紋でこれを靈芝弁が取り巻き、身は二段の竹節があってほとんど竹ノ節（四段目二十三位）と同意匠である。また、後者は各面毎に細やかな陰刻があり、甲の撮みは菊座で周囲が花卉となっている。

東五段目 十六位 色絵 交趾 蓮肉

『香合真図』享の巻に図示されているものは、蓋、甲の盛りあがりの部分に蘭のような花紋が凹凸の強い型押しで浮き出され、身の方は細かい襷紋が巡っている。この甲の浮紋から蓮肉を連想し、名付けられたものと思われる。『京美図鑑』にはもう一種の型が採りあげられており、鞠形は共通しているが、甲の花紋は単純な五弁が側方を向いて意匠されている。箱書に「蓮肉」とある由である。

東五段目 十七位 色絵 交趾 蛙

古写本に「時代よけれ共形あしき故安し、六百目」とあるが、蓋の部分全体が蛙の蹲踞する姿を意匠したもので、身の方は菊輪花の襷紋を見せている。番付では色絵を理想としているが、通常は白檀または、惣白檀となっている。

東五段目 十八位 大小有 青磁 トキヤロ

苦屋舟に人物が一人乗った特異な意匠のもので「舟人物」と箱書されているものが多い。トキヤロの名の由来は、実は伽野郎（とぎやろう）から来ており、要するに舟上にておとぎを務めた、朝妻舟を連想して名付けたものとされている。かつてある数寄者がこれを非として、雪霄月明の夜、舟に乗って戴安堂を訪れた子猷の故事に因んでこの香合を「戴安堂」と呼ぶべきであると主張したが、一般に用いられず、反対にこの人の渾名にしてしまったという笑えぬ挿話が残されている。元来この類は中国で香炉に造られたもので、大、小様々ある

ものを、その中から小振りで香合に適したものを選んで転用したのである。

東五段目 十九位 青磁 茶臼

諸写本や、諸記録にもその名は見えず、番付のみにその名を留めている。作例も出会いがないために、その形や大きさは明らかではない。

東五段目 二十位 祥瑞 瑠璃橋杭

四段目十一位に角橋杭があるが、これの惣瑠璃色のものをいうのであるうか、明らかではない。番付としては東の最下位にあるが、現物が存在すれば人気は決して低くないと思われる。

西方

西大関 染付 辻堂

西の最高位にあつて、東の交趾大亀と対峙するだけに、その威容と雅趣を誇示しているのである。『茶道荃蹄』には「角四方おろし屋根の上に松葉と木葉との模様あり」とあり、題は「辻堂」となっている。『茶道宝鑑』の香合図会には「宗甫書付には、ワラ屋とあり、閑事庵書付には落葉香合とあり」とあるところから、「辻堂」と決まるまでに色々な名称があったことがわかる。（「葛屋ともいった」いずれにしても四方箱形の上に四角錐が乗り、いかにも辻堂の名にふさわしく、しかもこれに松葉と木の葉の二種の落葉紋が散らされている意匠は、わびを尊重する茶の湯の道具としてこれ程意に叶うものはないということが出来よう。また『香合真図』に「至つてすくなし」とあるごとく、今日伝えられているのも稀で、東京に一点（現在五島美術館蔵）、名古屋に一点（関戸家伝来）、関西に二点（平瀬家旧蔵、他一点）が知られている。

西関脇 呉州 菊蟹

東の上段が交趾ですべて占められているのに対し、西の上段は染付七、呉州三、青磁三、宗胡録一と寄合いになっているが、呉州はこの菊蟹を筆頭に、別格の台牛（勸進元）を含めて十七種が挙げられている。菊蟹はその最上位にあるだけに造型、図柄とも抜群であり、古来の珍重ぶりもまた格別である。形は菊輪花の合子形で、その甲に染付で蟹の絵が描かれている。交趾「菊蟹」での

べたごとく、その型は一致し、産地の隣接を物語っている。ただし交趾の場合は蟹の部分が盛りあがっているが、呉州の方は平面となっている。また、呉州の場合蟹の絵は自由に描かれていて少しずつ相違があり、缺の先に玉のあるものもないものとあり、時に絵のないもの、蟹の代わりに兎が赤絵で描かれたものなども見られる。数はやはり少なく、東西に漸く数点を見出すに過ぎない。

西小結 青磁 桔梗

青磁は総数二十九種におよんでいるが、その最上位にあるのがこの桔梗である。殊に造型の妙が賞され、すなわち五角の甲が花卉をなし、古写本にくちなしのような、また巾着のようなとあるように寄せ口となった各弁が巧に花の個性を造りだしている。底は高台をなし、土見となっている。『茶道荃蹄』にもあるように青磁としては典型的な七官で、胴には波状の櫛目が見られる。その数は極めて少なく、赤星家伝来の他、漸く二、三点を数えるのみである。この赤星家伝来のものは大正六年の同家入札で、生島家の交趾大亀に次ぐ高値落札が世間を沸かせたものである。また昭和四年には勝田家入札で同種がやはり高値三位となって評判となった。後世木米がこの写しを巧に製している。

西前頭 筆頭 青磁 桃

交趾と異なり、青磁の場合は一つの型から幾つも打ち出して造るわけではないので、それぞれが少しずつ形を違えているわけであるが、特にこの桃の場合、個々の相違がはっきりしている。桃そのものに大、小や丸いもの、長いものなどがあり、さらに葉のつき方がそれぞれ違っている。『香合真図』には「大ぶり至つてすくなし、雲州侯より元矢倉京白木屋」と註記されている。事実、大振りで実の先が尖り、大きな葉が付けられている。また葉に特徴のあるものもあり、通常平たく付けられているものだが、立っているものもある。これは「立葉の桃」と呼ばれている。桃の場合、青磁の質も巾があり、七官に類するといえ、砧に近い釉色を見せているものが多い。青磁香合中、袋鼠、犬鷹などもこの手に属している。また、『香合真図』には棧蓋で小振りの、全面に葉紋のある変わり物が筆写しされている。

西前頭 二枚目 染付 哥全鳥

『茶道荃蹄』に「はは鳥」と題し「枯木にはは鳥の模様あり」と記されている。形は六角のヤロウ蓋で、甲にその絵があり、側面には梅紋が身蓋ともに散らし描きされている。枯木は左下から右上に向かっていているが、一点左から真横に右へ伸びているものを見る。枝も通常一本であるが、二本のものある。いずれにしても、その意匠はわび茶によく叶い、辻堂とともに濃茶香合の至宝として尊重されており、数も少なく、根津、畠山両美術館のものを含めて四、五点が知られるに過ぎない。また「遠州蔵帳」には「染付木鳥の香合」とあり、宗中記には「六角鳥の紋」とある。『茶道荃蹄』には四方角切にこの絵があつて「はは鳥」と題されているが、この形にはまだ出合っていない。なお、はは鳥はその音に合わせて哥全鳥、叭々鳥などとも書かれ、中国に棲む嘴の付根に毛を持つ鳥に類する鳥という。

西前頭 三枚目 染付 莊子

菱形、ヤロウ蓋の甲に、蝶が一つ浮紋されており、胴には身蓋にかけて四隅と中程四方に独特の花紋が描かれている。誠に高雅な意匠ともいうべく、蝶に因んで「莊子」と呼称され、ことに追善には最上の香合とされている。香雪美術館蔵のものを含め数点が知られ古来「莊子に無疵なし」の譬があるが、事実その多くが疵を有している。

西前頭 四枚目 染付 引捨牛

『茶道荃蹄』に「あゆみ牛にて、つな長く引捨てあり」と記され、形は四方入角である。「哥全鳥」や「莊子」と違うのは線の縁取りのないことで、絵も藍を薄めて描かれており、かえって引捨牛という画題に迎合して、一層雅趣を高めている。牛は水牛と見られるが、染付がにじんでその姿が判然としないが、長く引かれた綱の描きようも様々で面白い。虫食いの多いのもこの手の特徴である。『香合真図』には「捨牛」と題があつて牛が中程にかかれた図があり、「すくなし」と註記されている。事実三、四点に過ぎないと見られる。

西前頭 五枚目 染付 桔梗

青磁の桔梗と違い、花卉は盛りあがり、中央に藥が描かれており、五角は強

くくびれて、高台もまた、五角を呈している。染付香合としては、辻堂と同じく立体的であり、しかもその意は粋であり、概して染付の発色が美しいのもこの類の特徴である。若州酒井家伝来のものなど二、三点と数が少なく、他に平瀬家伝来のものもある。

西前頭 六枚目 **宋胡録 柿**

宋胡録は本分にもものべたごとく、タイの窯業地スワンカロークの訛ったもので、日本でこれに宛字したものである。柿の呼称も日本で名付けたもので、彼の地には柿はなく、恐らくマングスチンの実を象ったものと思われる。既に十四世紀頃から製産され、多分なにかの練物（薬用または香辛料）の輸出用容器と見られており、器種としては柿と、もう一つ食籠が主となっている。また、雲州名物として「九角」が挙げられ、異彩を放っている。いずれにしても同種中、保存状態のよい艶のあるものが選出されたたわけで、近年東南アジアの各地で発掘され、一時伝世のもの相場にも影響をおよぼしたが、結局名物級のものは、なんらその評価をさげなかったのである。数ある中から茶人の意に叶うものが精選されたゆえに、番付の位置を高めたわけで、柿という呼称も茶趣を増していると思われる。現在名物級に列するもの十数個におよんでいる。

西前頭 七枚目 **青磁 一葉**

青磁第三位にある一葉は、その意匠と寂びに叶う呼称で、これまた、番付の位置を高めていると見られる。なお、この類は二種あり、すなわち葉脈を沈筋で現したものと、この沈筋のないものがあり、前者は概して緑色を帯びている。前者は特に葉脈が鮮明なものが多い。香雪、根津美術館（両種あり）など、東西に数点を知る。

西前頭 八枚目 **吳州 松皮**

松皮は松皮菱の略で、三階菱を指している。『茶道荃蹄』にも「三階菱にて甲に人物あり横に漁樵、左右竹」とある。すなわち、甲の絵は型通りの枠取りの線（重と二重と有）の中に一人の高士らしき人物が水辺の土被に座しており、水辺には草の生きうるものと、杭の大小が見られるものがある。そして人物は腕を拱く者、釣する者、杖または団扇を持つ者などあるが、いずれも左

向きであることも注目される。側面は身蓋をかけて、四面のうち二面が漁人と樵人で、残り二面が竹となり、両者が交互している。なお、この図柄は、後の（二段目二位）木瓜とまったく軌を一にしていることは興味深い。また、染付にも同型の松皮（菱）があるが、この方は図柄がまったく自由である。平瀬家、加賀松岡家、同山川家伝来のものが知られる。

西前頭 九枚目 染付 張甲牛

四方箱形の蓋の甲が盛りあがり、これに牛の絵が描かれているのでその名がある。『茶道荃蹄』には「角、甲に臥牛の染付、横に業平ひし様なる模様あり、牛の向きに左右あり」と記されている。呼称は正しくは「はりこううし」であるが通常「はりこうし」と発音し、「張子牛」の字を宛てていることもある。また、牛の向きに左右あるのも面白く、昔は左右で価格が違うとされたが、今日ではむしろ染付の色合いや保存状態の方が優先している。甲の張りといい、側面の模様といい、あまりもの茶趣深きゆえ、恐らくは明末景德鎮窯への茶匠好の代表ではないかと見られ、それだけに茶道具としての評価も格別であることは当然であると思われる。東西に著名なもの、約十点を挙げる事が出来る。

西前頭 十枚目 兎上手 吳州 赤絵四方入

『茶道荃蹄』に「吳州赤絵」と題して「定て有八葉入角にて、牡丹と兎の模様あり。葉萌黄、兎ハもへぎなし。横宝尽、又大中小丸もあり」とある。これは四方入角をこの類の代表としているの意であり、末尾に大中小丸もあるということは四方入角以外の同類の赤絵香合を示している。要するにこの位置では、四方入角の姿のものを指し、四方入はその略である。甲の絵は兎を上とするが、その例は頭註の通り稀少である。橘や蓮花を連想させるものはいくつがあるが、赤絵と萌黄が巧に配色されており、形物香合中花形として人気が高いのである。

西前頭 十一枚目 染付 水牛

前掲の「引捨牛」と趣を等しくするもので、四方入角の平らな蓋の甲に、水中をゆく水牛が浮紋されている。そして上方に月が半分描かれていて、いかにも茶人好みの風流味満点の図柄である。染付色の淡いところも引捨牛に似るがこの方は周囲に輪郭あることを相違点としている。波は染付のべた塗地を釘彫

で模様したものでこれまた、雅趣を呼んでいる。藤田家伝来のものの他、数点が知られる。

西二段目 一位 染付 兜巾茄

兜巾茄は兜巾茄子の略で、文字通り山伏の兜巾に似た形の器面に陰陽の茄子の絵が描かれている。『茶道荃蹄』にすでに「兜巾茄子」と題されて「四方風にして、茄子五つかげひなたの模様あり」と記されている。また、『茶器名物図集』には「頭巾茄子」と題し「胴合ヒ、甲に茄子ヒナタニて二ツ、カゲにて一ツ、胴にヒナタニて二ツ、蔭で式ツあり。ベタ底にて地土見る」とある。茄子の数は通常七つで、『茶道荃蹄』の五つとあるのは見当違いと思われる。かげ日なたとは、藍溜と白抜を言うわけで、その形や方向が自由奔放であるのが興味深い。数は比較的多い方で、全国に二、三十個は存在するが、人気は頗る高い。

西二段目 二位 呉州 木瓜

『茶道荃蹄』に「松皮菱の模様の通りにて形木瓜」とある。すでに松皮菱のところでのべたごとく高士が水辺に座する図であるが、『香合真図』および『茶器名物図集』にはともに梅枝の図が描かれている。また前者には「木香」、後者には「木瓜形」の題が見られる。また、側面の図柄はまったく松皮菱と同じで漁樵紋と竹が交互に描かれている。ただし、輪郭は松皮菱が一重であるのに対し、木瓜の方は二重である。

西二段目 三位 呉州 銀杏

『茶道荃蹄』に「木瓜ほどの大きさにて、イチヨウの形也。惣て竹の模様」とあり、銀杏の胴合に甲、胴ともに竹の絵が描かれている。同段の後、十九位に染付銀杏が列していて、形は同じであるがこの方は甲の図柄が竹の他色々である。恐らく同じ頃、日本から注文が発せられたものと思われるが、呉州を上位としたのは恐らくその雅味ゆえであろう。

西二段目 四位 呉州 周茂叔

『茶道荃蹄』に「葉入角、欄干あって人物あり、水にチヨボゝとしたるものあり、蓮に見立たる也」とある。すなわち、四方入角の、やや盛りあがった甲に、高士が欄干のあるところで肘をつき、水面を眺めている姿で、その水面に

点体の見られるものと、ないものとがある。見られるものはこれを蓮に見立てて、いっそう重宝するのである。側面は宝尽しの変形で七宝と巻物の二種が意匠されている。

西二段目 五位 大中小 **宋胡録 食箸**

「柿」のところでのべたごとく、タイのスワンカロークの産で、この方は蒂がなく、合子形の甲が平になっている。変形のものとして高台のついているものもある。独特と文様を見せるが、柿と同様の文様のものも見られる。柿よりは数は少ないが、意匠に雅味のある柿を上位にしたものであるう。

西二段目 六位 **祥瑞 蜜柑**

祥瑞中最上位にあるのがこの蜜柑である。十点余りを数える伝世のものがあ
るが、少しずつ形を異にしている。摘みが多葉を付けているものや、巻蔓を有
するだけのものが見られる。染付釉はさすがに濃い瑠璃色を呈し、祥瑞の特徴
をよく発揮している。祥瑞の場合、同じ題であっても、それぞれに形や図柄を
異にする場合が多い。蜜柑は多くが在銘で蓋裏または底に「五良大甫吳祥瑞造」
と二行書きされている。『茶道荃蹄』には「織紋もやう、上に葉のあるをよしと
す」とあるが、その文様は実に千差万別で、織文様の他に、松竹梅、山水人物、
丸紋、詩語など、色々な構図をもって意匠されている。また、摘みの葉の数は
五、七、九枚とあり多いものを上としている。『京美図鑑』には「蜜柑」として
二頁に亘って寸法書や絵図があり、それも見取り図の他、甲、底、展開図にま
でおよんでいる。これが後に鴻池入札で大人気を呼んだ香合で、この時何と十
二万三千円という高値で落札されたのである。図によると丸紋が蓋に九つ、身
に十三あった。また註には「藍上り美ク、一段見事也」と記されている。

西二段目 七位 銘有 **祥瑞 横瓜**

『茶道荃蹄』に「豎瓜同様のものに、豎にうねりあり、うねりなきものを道
具屋にて枕というなり」、また別本に「綸子形菊あり」、さらに「軸ありはよし、
葉有もよし」などとも見える。いずれにしても瓜を横にした形で、ほぼ円筒形
に近く、撮みのあたりが凹んでいる。いずれもあこだ状の襷、すなわちうねり
があり、枕とは本質的に違いがある。また、頭註に「銘有」とあるが、在銘の

ものは稀である。これは豎瓜とともに遠州侯直々の注文品ゆえに銘は入れなかったのではないかと推測される。模様は様々で、輪繫紋や『京美図鑑』には甲に山水人物絵、胴に丸紋、底に詩文字のものが掲載されている。『香合真図』には輪繫紋のものが図示されているが、これには「蓋裏五良大甫、銘ありはすくなし」と註記されている。数は豎瓜より少なく、世に知られるものは三、四点到過ぎない。

西二段目 八位 銘有 祥瑞 立瓜

前項の横瓜と同手で、これを豎に起こして摘みを頂上とした意匠である。ただし同名で肩と底が丸味を帯びたものも含まれており、この同形に「吉之字立瓜」（東五段目六位）がある。『香合真図』貞の巻には「瓜」としてこの図が描かれている。なお、この手は蔓に葉を伴わない。やはり本流は円筒形に近い形の類と見られるが、その模様は様々で、まさしく祥瑞模様の見る感がある。横瓜同様頭註に「在銘」とあっても在銘のものは稀のようで、やはり遠州注文の説が有力と見られるのである。比較的数字が多いが、その重宝ぶりは決して横瓜に劣らぬものがある。『茶器名物図集』には丸紋のものが図示され、「丸紋揃ヒ詩などあるを賞翫す、ツマミ五葉・三葉あり、胴合にて底地土見る」と註記されている。

西二段目 九位 染付 拍子木

『茶道荃蹄』には「折木」として「甲も横も織模様あり、まれに上に文字あり」と記されている。長方柱を二本食い違いに組み合わせた意匠で、その名の通り拍子木を取材したものでかどうかはわからない。文字にも色々あり、「福寿幸寧」、「富貴長命」、「玉堂佳器」、「天下泰平」、「清風明月」などが古記録にあり、『京美図鑑』には「清風明月」が見られる。側面の図柄は干網、梅鉢、七宝、草花紋とが大半を占めていると見られる。

西二段目 十位 染付 鞠挟

『茶器名物図集』に「甲に染付、竹有、檀芝瑞下絵といふ、又蘆雁なりて甲むつくり高し、ヘタ底、土見る、ヤロウ蓋也」とある。鞠挟の名の起こりは六角の各面が内側に彎曲していることで、あたかも蹴鞠を挟んで留めておく鉄木

の形に似ているからである。図柄は鳥の立つ山水図がこれを代表し、これが前記の「蘆雁有りて」に相当するものと見られる。他に、同じ構図の山水にも人物の座する絵が見られるが、前記の「竹有、檀芝瑞下絵」がこれに該当するかどうかは判然としない。側面は芦紋と草花、蝶紋とが見られる。

西二段目 十一位 染付 分銅鶴

長角の入角胴合の甲に分銅形の盛りあがりがあり、その中に鶴の絵が描かれている。これは次の分銅蝶もまったく軌を一にしており、鶴が蝶に取り替えられているのみである。分銅の周囲は累座紋が取り巻き、側面は梅花紋が配されている。もっとも分銅の中の鳥は鶴か否か定かではないが、これを敢えて分銅鶴としたことは吉祥を求める茶人の才量によるものであるうと考える。なお、『香合真図』では「角分銅」としてこれを図示している。

西二段目 十二位 染付 分銅蝶

分銅鶴でのべたごとく、甲の文様により名付けられたもので、もりあがった分銅の中に蝶らしき昆虫が一羽、横書きされている。分銅鶴と同じく数は少なく、貴重視されており、一方が吉祥、一方が仏事などに適当とされている。ただし蝶の場合は春を謳歌する香合としてもふさわしいかと思われる。

西二段目 十三位 染付 犬莊子

食い込みの強い入角胴合の甲に、胴で貼り付けられた獣種の判然としない動物が飾られている。これを犬に見立て、また、本体の構造を、莊子と相通ずると見ることによってこの呼称が生まれたものと見られる。古書にその名が見えぬことから、番付作成時の発送と考えるのである。獣形は概して胴長で尾が巻いているが、胴が反って尾が頭に付いているものも見られる。根津美術館、香雪の他、数点が知られているが、その意匠の面白さから人気の度は高い。

西二段目 十四位 染付 圓窓菊

六角胴合形の、平面の甲に、支弁と蝶を伴った菊花が、円窓の中に描かれているのでその名がある。六角の胴側には、各面が身、蓋にかけて菊と蓮とが交互に、これまた枠取りされて描かれている。全体としてまとまりがよく、手がさがることで好評であるが、数は多くない。

西二段目 十五位 染付 糸巻

四方胴合の各辺が凹んでいて、上から見た姿が糸巻の形に似ていることから、その名がある。甲の絵は様々で、荒磯や山水に騎馬人物、宝尽などが知られており、側面の絵は何れも簡単な草紋で飾られている。大きさはほぼ一定しており、小振りである。

西二段目 十六位 六角麒麟 染付 櫻川

六角胴合の甲に、青海波上を麒麟（牛と麒麟の中間を思わせる動物）が飛行する図が描かれており、これに花紋が、水上と頭上に配されていることから、桜川と銘されたもののようである。次題の「桜牛」との近似が問われるのであるが、相違点としては動物が面をあげて飛行する姿を見せていることで、器種としてはまったく同質のものであることがわかる。側面は各面に身、蓋を分けて花紋が描かれている。

西二段目 十七位 長角 染付 櫻牛

前項でのべたごとく桜川との交錯が見られるが、この桜牛の方は、動物が臥牛であることが約束となる。『茶道荃蹄』にも「六角、甲に臥牛と散桜、横に宝尽しありて、花八桜にあらず、桃ならん、牛ヲ桃林野ニ放ツの意ならん」とあり、臥牛の居ることを明記している。そして、この桜牛には桜川とまったく同じ背景の、すなわち青海波のあるものと、水のまったくない花紋のみが散らされたものがあり、『茶器名物図集』には後者が図示されている。いずれにしても桜川とともに、その花が桜でないとしても、その名称ゆえに桜の頃の香合としては最適のものとして珍重されている。なお、頭註に「長角」とあるのは長四角の意ではなく、六角がやや横に長いという意に解釈される。

西二段目 十八位 染付 松皮

呉州の「松皮菱」が先行しているが、同じ意匠をどちらへも注文したものであろう。ただし、呉州ほどに大きさや整形が端正でなく、多少横長のものや、大振りのものも見られるのである。また図柄も呉州が人物紋でほぼ一定しているのに対し、獣、鳥、草花など、さまざまで自由である。側面は大方竹か花紋となっているが、これも描きぶりは自由である。なお、虫食いの多いのもこの

手の特徴である。

西二段目 十九位 染付 銀杏

これも呉州の「銀杏」と同形で、なんらかの繋がりが考えられるのであるが、甲の絵は自由である。中でも蜘蛛の巣絵はその評価が高く、畠山美術館蔵ともう一点が知名である。いずれも銀杏の面の左上方に蜘蛛の巣が描かれていて、前者は二匹、後者は一匹の小虫がこれに配されている。ともに素地が白く、染付が鮮明であることも注目される。他に山水絵、花蝶絵、竹の絵などが知られ、いずれも小振りで、胴合となっている。側面の絵は笹紋または草紋となっている。

西二段目 二十位 呉州 有馬筆

四方箱形の蓋甲の中央に、小人物が立ち、これを有馬土産の筆を頭から立てるとぴよこりと飛び出す小人物に譬えたものと思われる。遠州好との伝承があるが、これは遠州好の同箱書もある祥瑞「豆男」と意匠がよく似ていることにもよるものと思われる。『茶道荃蹄』に「小角、前後に漁樵、左右竹、上に至って小さき人形有」とある。ところが、現実にはいずれも竹は左右ではなく、前後にあり、そして人物が左右になるが、漁樵ではなく、左右とも棒を持って歩行する人物が描かれている。甲には必ず二重枠が描かれ、中央に立つ人物は頭部に毛髪のごとく染付が塗られている。同型ではあるが人物の様子の違うものも見られる。

西二段目 二十一位 大中小有 呉州 赤玉

呉州赤絵の合子丸形香合をいう。頭註にある通り、大中小あり、そのうち小を「小丸」と呼び、同類中もつとも賞玩されている。この手は図柄が一定しており、すなわち蓋の方は中央の丸を囲んで四つに区割され、相対する二方は赤で塗り潰される。もう二方は花の一枝が描かれ、花は赤で陰と陽をなし、葉は萌黄となっている。中央の丸い部分は二色で花が描かれている。また身の方は萌黄の小さな玉を赤の紐が継ぐという図柄である。大、中の方は大きさ、図柄とも一定せず、その中でも甲に白抜きの兎の居るものが特に人気が高い。なお、小丸の場合、多くの身、蓋の内側に数字が書き込まれている。これは焼くとき

に身蓋を照合する番号であると伝えられているが、現実に出合っていることは稀で、それだけ珍重されることになる。

西三段目 一位 **染付 臺布袋**

長角箱形の蓋の上に身を反らせて閑座する布袋が居ること、その名がある。底には四つの粒足が付けられている。布袋はその目、口、衣を染付で描き、かならず前方の角に軍扇を斜めに置いている。胴側は身蓋をかけて山路が巡り、堂塔、人物、樹木が配されており、多く場合、正面に人物が来るように描かれている。布袋の姿態、容貌に小異はあるが、全体の形容に興味が深いことで以上の評価が持たれている。

西三段目 二位 **染付 大海老**

海老をそのまま意匠化した香合で、大きな目が異様に睨みを利かせている。胴は荒く節を成し、ゆるく彎曲し、胴体全体に染付が塗り潰されている。数はあまり多くない。

西三段目 三位 **染付 立唄**

唄貝を立てた形で、横に倒した横唄（四段目六位）と相對している。染付の塗ようは様々であるが、通常頂上から螺旋状に太く線描きされて、その先は蓋から身に伸び、胴の凹みのところで渦巻きとなって終わっている。そして多くはこれに染付の吹墨、または刷毛がけされている。

西三段目 四位 大 **染付 碁打**

六角でわずかに甲が張っている。その甲の図柄が碁打人物であることから、その名がある。胴側は波文が一周している。大、小あり、大の方を上位としている。

西三段目 五位 **呉州 鳥宝珠**

宝珠形をなした呉州香合が色々あって、その中で木瓜杵の中に鳥の居るものを鳥宝珠と呼んで上位に置いている。すなわち、蓋にふくらみのある宝珠形で、身蓋とも四区割りされて、それぞれに窓枠があり、蓋に鳥、身に花紋が描込まれている。数もあまり多くはない。

西三段目 六位 祥瑞 鳥差瓢箪

『茶道荃蹄』に「丸の内に馬乗と鳥と鳥差しとの絵あり、その外織文もよふあり」と記されている。祥瑞で瓢形は外にもあるが、特にその中で、白抜丸紋に鳥と鳥差の絵のあるものを上位に置くのである。古来、この類は遠州好の伝承で高名あり、絵の下絵は松花堂が描き、瓢の形を遠州が意匠して祥瑞窯に注文されたものといわれている。そしてこの類は素地も精選され、染付の色も濃く、いかにも上作の伝を証している。上下とも窓は三つずつで、鳥および鳥差（棹の先に取り餅をつけて鳥を捕らえて歩く人物で、鳥指とも書く）の姿態がそれぞれ三様に描かれている。ただし、人物は一つを鳥差しとし、他は、違った人を描いている場合もある。瓢形は遠州の好みらしく、胴のくびれが強く、上下の大きさが接近している。丸窓以外はいずれも祥瑞独特の様々な織紋でこれを埋めており、区分けも色々である。また撮みは蔓の切落としとなっているものと正しい同筒状のものがある。なお、水戸家伝来のものは、形の違った瓢箪と、兜と祥瑞三点が一組として伝えられており、鳥差瓢には遠州筆で「あに」と箱書されていて、同類中の代表であることが知られるのである。

西三段目 七位 祥瑞 褶扇

文字通り扇形胴合の甲に褶がつけられているからである。『茶道荃蹄』には「瑠璃扇」と題し「扇の地紙、畳半分あり、地紋の上へるりを懸けたるもの也、青海のもやうあり」と記されている。伊達家伝来で、地紙および側面すべて織模様となり染付の色も美しいものや、京都寺村家入札で評判だった詩入のもの、香雪美術館のものなどが著名である。また『香合真図』には甲に丸紋抜きがあつて兎の絵が描込まれているものが筆写されている。

西三段目 八位 祥瑞 拍子木

染付と同じ拍子木（二本の拍子木を食い違いにした形）で、これに祥瑞紋を描いたもので、『京美図鑑』に写真二例、図絵一例が掲載されている。甲が二種類の織紋が食い違い、側面に横縞が見られるものや、総織紋地の甲に花菱窓があり、絵が描込まれているものなどがある。

西三段目 九位 祥瑞 茄子

形は蒂付の茄子形で、ほぼ一定しているが、図柄はまさしく様々である。『香合真図』には豎割りの織紋のもの、『京美図鑑』には松竹梅に雀、鹿などのいるものが所載されている。なお、撮みはいずれも蔓状を呈している。いずれにしてもその形状の良さと、染付の鮮明な発色で好評を得ている。

西三段目 十位 染付 桃

桃の実形で、葉が貼付と絵で飾られ、さらに蝶の絵が景を添えている。染付の桃にはもう一種（四段目十九位）があるが、この種を上位にしている。作例も大桃よりずっと少ないようであり、質的にも優っていることがわかる。『香合真図』元の巻にその筆写が見られる。

西三段目 十一位 染付 梔子

『茶道荃蹄』に「甲に梔子の花のようなる浮紋あり、横にも織もやう有」とある。形は六角胴合で記述のように花が浮紋になっている。ただし、側面の絵の方は織模様というより蔓草と竹模様で、記述と多少の相違が見られる。

西三段目 十二位 染付 鉄線

きざみのある八稜胴合で小振りの香合。甲は剣先様の花卉が稜に囲まれて八弁をなし、これを鉄線と見立てたもので、『香合真図』にも「鉄線」としてその図が見られる。

西三段目 十三位 染付 葛籠

『香合真図』には、長角で上下とも窄んだ葛籠形の香合が描かれ、『茶器名物図集』では、四方入角で同じく葛籠形のを写している。甲の図柄は山水人物で、側面は草紋である。後に葛籠牛（四段目十二位）がよく似た形をしている。いずれも小振りながら、その形容と図柄に趣があり、愛玩すべき小器ということが出来よう。

西三段目 十四位 染付 半開扇

半開きの扇形胴合で、甲に扇の地紙と骨が描かれ、紙の部分には蘭と見られる草紋が描写されている。側面は無地で甲に褶の凹凸のあるものとなないものがある。藤田家伝来のものが知名である。

西三段目 十五位 染付 火焰馬

六角胴合で、甲に青海波上を馬が飛行する姿を描き、その頭上に火焰のあることから、その名がある。側面は蓋の方が七宝と巻物で交互に飾られ、身の方は二種の花紋がこれまた交互に配されている。身の方が蓋より倍程の背丈があることも注目される。

西三段目 十六位 染付 臺蛤

その名の通り蛤形に台のついた形で、至って小振りである。甲の絵は一定していないようで、波上に蟹がいてまことに図柄が好ましいもの（小堀宗慶箱で「蟹」とある）や、『香合真図』には海老絵が見られ、『京美図鑑』には一種の荒磯と見られる絵のものが掲載されている。いずれも海辺にゆかりの図柄であり、しかも小さいゆえにかえって愛らしく、珍重されているのである。なお、身の方は高台をめぐって波紋が描かれている。

西三段目 十七位 染付 臺麒麟

古書にも記述がなく、筆写も見当たらない。また現物にもそれらしきものが見当たらずゆえ、題をとどめるのみである。

西三段目 十八位 染付 花莊子

菱形胴合で、しかも中央に蝶の絵があり、その周辺を花紋が囲んでいることで、その名がある。莊子よりはやや大振りで、蝶の方向が花莊子の方は莊子と反対の、菱の長い方の線上に置かれている。概してその造形も莊子より粗放で、野趣に満ちている。松浦家伝来のものが代表として知られ、絵替りとして蝶が二匹比翼している面白いものもある。

西三段目 十九位 染付 玉章

『茶道荃蹄』に「結文」と題して「大小あり、小を玉章といふ、横織紋、上に山水、橋の上に碁打ちあり、小は馬乗りありて、結びめなし、千家所持、大の方、随流の書付あり」と記されている。すなわち、小の方は結び目がなく（結び目がなくのではなく、左右長さを違えて小さく結ばれているが結び筋を描かないのである。）大の方は大きく結び目があり、同記によると小の方のみを玉章と呼ぶとしている。『茶器名物図集』にも「結文」としてその両方が図示されて

おり、続いて「玉章」として小のみが図示されている。また『香合真図』は「玉章」として小のみを図示している。したがってここでは小のみを掲げ、番付には「結文」の題がないので、大の方は一応番付外として掲げることにした。

代表例として、甲に騎馬人物があり、側面は草紋のものや、形替わりで結び方に二重の様相を呈し、図柄も釣人のいる山水となったものもある。いずれにしても小品の中に、情緒の深い意匠と図柄が盛り込まれ、楽しみの多い香合ということができる。

西三段目 二十位 染付 菱牛

『茶道荃蹄』に「ひしなり浮もやう、臥牛あり、火走牛とも云、横織模様」とある。記述の通り、菱形胴合の、甲に臥牛があり、これに火焰と七宝紋が付随している。そして牛の部分が浮紋となっており、側面は上部が唐草、下部が竹、または、上下とも竹になっている。総じて大振りで、虫食いの多いのも特徴となっている。『茶器名物図集』には同形、同図で、側面が織模様のもものが筆写されている。

西三段目 二十一位 染付 菱馬

『茶道荃蹄』に「ひしなり、甲に馬あり、横業平菱の様の模様有」とある。ただし、菱牛と比べると、大分背が低く、寸法も小振りである。絵の方もなにやらたどたどしく、馬の形姿や容貌がはっきりしない。興味深いのはその側面で、最上段にいる「張甲牛」の側面にある業平菱を崩したような織物模様が見られることである。

西三段目 二十二位 竹分銅トモ云 染付 笹分銅

分銅形胴合の蓋の甲に笹に絵があり、さらにその中央に分銅紋が浮き出している。身にはまた、高台を伴っている。絵はむしろ笹より竹の方で、註にある「竹分銅」の方が現実には則しているが、語呂としてもなにやら笹分銅の方が馴染みやすく思われ、風流心を誘うのである。また分銅は富みにつながり、笹は福笹とも結びつくので関西では特に喜ばれている。

西三段目 二十三位 染付 竹ハシキ

染付は四方棧蓋で撮みが竹ハシキになったものをいう。寸法は一定しないが、

総じて小振りで、図柄も個々に差異がある。撮みは竹の枝が三本に分かれており、左右が蓋の面に貼り付き中央の一本がハジキになっている。ハジキとは、昔豆鉄砲の弾く部分の弓なりの姿に由来している。なお、四方箱形であるが、幾分裾で窄んでいる。

西四段目 一位 大小有 吳州 松毬

宝珠形の身蓋ともに鱗紋で埋まり、全体として、松笠を思わせるものがあることからその名がある。大小有るが総じて小振りで、その数は少ない。

西四段目 二位 大小有 吳州 浮鳥

「浮鳥」と「都鳥」と「鶉」（番付にはこの題はない）の三つの形についてはいささかその解釈が交錯しているようである。すなわち『香合真図』では、鳥形の下の方くらんだ形のことを掲げて、これに「吳州うづら」とし、『茶道宝鑑』では「吳州都鳥、浮鳥ともいう」と記されている。したがって同じものに三つの名称がつけられたことになるが、加藤義一郎氏が『形物香合考』の中で、この姿のものを四例所見し、その内三つまで箱に「浮鳥」とあり、一つだけ「都鳥」とあったということで、この姿を「浮鳥」と決定したとあることと、「吳州浮鳥」と箱書（伝早見純斎筆）のものをしていることから、一応この説にしたがうことにした。すなわち、台座付のべた底で、全体が水に浮かぶ鳥の形をしており、蓋のみに絵があつて、羽根が描かれ、首が小さく持ち上げられていて、いずれも半ば左に捻っている。すべて小振りでまことに可愛げな風情の香合ではある。

西四段目 三位 吳州 都鳥

「浮鳥」のところでのべたごとく、その形の決定には疑問を残しているのであるが、ここでも一応加藤説を採用する。すなわちいずれの古書にもその名称および絵図を見ないのであるが、加藤氏所見の二つの香合にこの名称があつた由で、それは撫四方胴合形の、甲に水辺に浮く小禽を貼り付けた姿のものである。鳥の容姿はいかにも都鳥と呼ぶにふさわしいもので、浮鳥とともに茶趣深いものがある。

西四段目 四位 白毛赤絵毛有 吳州 荷葉

荷葉蓋を伴った壺形の香合で、頭註のごとく赤絵と白無地があり、赤絵にはタンパンが所々に加彩されている。総じて小振りで愛玩の珍器というにふさわしい。

西四段目 五位 兎毛有 吳州 菊鷺

菊輪花の合子形で、輪花のきざみは細やかである。甲には蓮と鷺の絵が吳州染付で描かれていて、略画ながら筆の運びは確かである。

西四段目 六位 染付 横唄

唄の横に臥した形で、立唄（三段目三位）と対照している。染付で貝の螺旋に合わせて筋が引かれ、その先が凹みのところで渦をなし、身蓋の所々に梅鉢が配されている。稀にはこれらの描画のないものもあるが、吹墨だけは大方のものに施されている。また甲に藻草の絵のあるものも見られる。総じて小振りで、立唄よりは数も多い。

西四段目 七位 染付 胴乱

厄介なのはこの「胴乱」と、次の項の「屏風箱」である。とうのは、『茶道荃蹄』を見ると「屏風箱」と題して「甲にかげひなたの桔梗形あり、前後に筏乗と野馬二疋とあり、横にすゝきの様なものあり」と記述されているが『香合真図』『茶器名物図集』のどちらにも、この同じ図柄のものが描かれていて、ともに「道乱」と記されている。そして『香合真図』には「屏風箱」の名は見えず、さらに「大道乱」があつて、同絵・同形の大形のもものが描かれている。また『茶器名物図集』の方は、別に「屏風箱」の図示があり、同形ながら絵が異なっていて、側面に座する人物、甲に馬一頭が山水図中に描かれている。そして「胴乱」ともども遠州雛形によるものと記されている。もう一つの資料は、この同類のものの箱に玄々斎が「道乱」と箱書しているところから、前項のものを「胴乱」とした次第である。しかし、今後まあ、両説が行われることは至極当然で、どちらも間違いでないということが結論となる。なお、『京美図鑑』では、前項の手を「屏風箱」とし、「胴乱」としては別種の角撮みのある飛箱形のもものが掲げられている。

西四段目 八位 染付 屏風箱

前項でのべたごとく、『茶道荃蹄』によれば「胴乱」が「屏風箱」となるが、番付成立時に近い『香合真図』、『茶道名物図集』がともにこれを「胴乱」としていることで後者の説を取った。しかし両説の行われていることはこれも前述のごとくである。なお、『京美図鑑』で「胴乱」として掲げられていた飛箱形のものは『香合真図』では「虫入」となっている。

西四段目 九位 大小有 染付 開扇

「開扇」は青磁（東二段目一位）にもあるが、染付では、三段目十四位に「半開扇」が先行している。形は大小あり、合口はヤロウ蓋（胴合）と棧蓋とある。図柄は様々で、梅の絵、竹の絵、山水の絵の他、雲鶴紋のものや、『京美図鑑』に載せられた詩入のものなども見られる。側面は宝尽が多いがこれも様々である。

西四段目 十位 小 染付 碁打

三段目四位に「大碁打」があるが小の方はやや位を落としている。形は六角で蓋の甲がわずかに盛りあがり、絵は碁を打つ人が山水を前に対座しているが、必ずしも碁打とはかぎらず、孤独して閑座する人物を配したものも見られる。寸法は極小ゆえに、茶箱の香合としても重宝されている。

西四段目 十一位 染付 飛竜

『茶道荃蹄』に「葉入角、飛竜のもやう有」と記されているが、他書にその図示などがなく、また、この説明によって交趾「飛竜」（東三段目九位）とはまったく造形を異にしていることがわかるゆえ、現物がないかぎり、その形容は不明である。

西四段目 十二位 染付 葛籠牛

一名「玉子牛」ともいう。三つ足のある葛籠形の甲に牛が描かれ、また、これが玉子にも見えることから玉子牛ともいうのである。図柄は甲全面に牛のみが居るものと、牛の上に笹が描かれているものがあり、いずれも小振り可愛げである。なお、同形で牛の代わりに山水図のあるものも見られるが、一応これは葛籠の項に揚げた。

西四段目 十三位 染付 山道

『茶道荃蹄』では山路を山形とし、まったく同形のものが示され、同一物であることを証している。すなわち形は不等辺三角形にうねりを伴った山形で、図柄は騎馬人物、釣人、碁打人物などでいずれも山水を背景にしていることを特徴としている。なお、同種の絵が描かれていて形は山道と銀杏の中間思わせるおもものもあり、これにやはり「山道」の箱書があることで、形替りとしてこの項に掲示した。

西四段目 十四位 染付 隅田川

その位置の割に、格別人気の高いのがこの隅田川である。多少ふくらみのある四方形の甲に対角にハジキが付けられ、これを境に、上部に垂れ下がる柳、下部に川面を行く屋形船という、いかにも日本人好みの意匠が茶人の心を捉えたのは当然である。しかもこれに「隅田川」と銘し、謡曲の悲劇を連想させることにより、一層この香合に愛着を覚えることになった。勿論これらは、注品と見られるのであるが、その中でも特に成功した作例といえることができる。おもしろいのはその図柄が皆少しずつ違っていることで、柳のなびき方、舟の形、人物の配し方、波の様子、そして手の反り工合（手に染付筋のあるものも見られる）などに微妙な変化があって、その染付の色合とともに鑑賞の極め手となるのである。なお、別に一葉形に同じ隅田川の図案の描かれたものを見たが、一応形替わりの欄に掲げることとした。

西四段目 十五位 染付 六角竜

六角項張り胴合形で、その甲に螭龍が描かれている。側面は蓋は丸紋、身は雲紋で、総じて小振りである。

西四段目 十六位 染付 都鳥

呉州の「都鳥」と違って、かなり実物に近い、鳥の形そのものを象った香合である。『香合真図』貞の巻に図示があり、『京美図鑑』では実物が得られなかったため、この図が掲げてある。

西四段目 十七位 染付 萬歳烏帽子

その形が三河万歳の冠っている烏帽子に取材していることからその名がある。

撫角長三角胴合の本体に、垂直に正三角形板が立つという、この意匠は勿論、日本注文で、図柄の梅の折枝も、茶人のもっとも好むところである。それだけにこれまた位以上の人気を得ている。

西四段目 十八位 染付 干網

平宝珠形の甲に、干網と飛行する群鳥が描かれており、干網の下の合口の辺に大波とさざ波が意匠されている。大きさはほぼ一定しているが、多少の相違もある。絵替わり、形替わりもあるといわれている。

西四段目 十九位 小毛有 染付 大桃

三段目十位の染付「桃」は枝を伴った葉の貼付が見られたが、この「大桃」の方は枝、葉はなく、大きくふくらんだ大形の桃の、身蓋一面に宝尽し、花枝、蝶などの小紋が、ほどよく配置されて器面を飾っている。註に「小毛有」とあるのは、この同じ意匠で小もあるということで、寸法が同じでも三段目の桃とは異質ゆえ、重複はしない。

西四段目 二十位 染付 角繫

二つの方形を菱に繋いだもので、総体に小振りである。図柄の多くは蓋の中央部を、形に添って囲い、これを雷紋繫ぎで飾り、その周囲には小さな丸紋と雲紋が配されている。図替わりもあり、その一例として『京美図鑑』に甲全面が宝尽し散らしのものが掲げられている。

西四段目 二十一位 染付 一葉

青磁の「一葉」が最上位に位されているのに対し、随分と差を付けられているが、現物はなかなか風流心を呼ぶ意匠である。すなわち、青磁と同じく全体が一葉形をなし、ヤロウ蓋で蓋の甲は葉脈に合わせて凹凸が見られるのである。側面には蝶および虫紋が散らされている。なお、葉形には二種あり、すなわち周囲が細い刻みになっているものと、大きく切込まれているものがある。『香合真図』利の巻に図示のあるのは後者で、さらに同巻にやはり一葉に類すると思われる作品が「柊」として掲載されている。また別本に一名「鯉の子」ともいうとある。

西四段目 二十二位 染付 柿

『香合真図』貞の巻にこの「柿」が図示されているが、これによると柿実形で、蒂があり、胴に豎筋が見られる。『珉平控書』にも記載がある由で、これには松竹梅、花紋、鳥などが描かれているという。

西四段目 二十三位 染付 小海老

三段目二位に「大海老」があるが、これをそのまま小さくしたのではなく、少し意匠を違えている。すなわち、そのまま海老の姿を写しているが、身の方は小さくなり、蓋の台のような役目を果たしている。絵付けは染付が縞に塗られたものと吹墨とが見られる。

西四段目 二十四位 染付 海鼠

『香合真図』利の巻に「半月」としてこの図があり、「なまことも云ふべき」と註されている。すなわち形は半円形で、なんとなく海鼠を連想するところからその名が生まれたものと思われる。蓋は棧蓋で、その甲に宝尽し紋、草紋、山水人物紋など、各種におよんでいる。寸法もまた大小ある。

西四段目 二十五位 染付 菱の実

三角の各辺の中程がふくらんだ形で、寸法は極小である。菱の実といえば菱形であるべきが、三角でその実を連想させるものがあり、命銘の妙ともいうべきであろうか。絵柄は色々で牛二匹のもの、藻魚紋などが知られている。なお、『香合真図』には別に「菱」があり、この方は本当に四方菱形である。いずれにしても極小ゆえ、茶箱には最適であるといえよう。

西四段目 二十六位 染付 長角ハシキ

大振りの長角角切りの形の甲に、弾きの撮みが付けられている。図柄は蓋、側面ともに市松でかなり派手である。この手のときには銚子の蓋に転用されたりして、その派手さがかえって生かされていることになる。

西五段目 一位 染付 丁字

宝尽し紋の中にある丁字を象ったもので、一つ丁字と繫丁字とある。どちらも棧蓋で、後者の方は打違いに重ねられており、『香合真図』にはこの方が図示されている。図柄は様々で、一つ丁字の場合、絵の向きが尖った方を右に見る

場合と上に見る場合がある。そして一つ丁字には山水図が多いが、繫丁字の場合は宝尽しや草花紋が多く見られるようである。側面は七宝、宝尽し紋が多い。吉祥に結びつくだけに位以上に珍重されている。

西五段目 二位 染付 将棋駒

将棋の駒形で、胴合になっている。数の少ないもので、『京美図鑑』に一例が掲げられているが、図柄は全体を斜線のある鱗紋で埋め、甲の中央に、同じく駒形の白抜きがあって、そこに斉帝の文字がある。また、『香合真図』享の巻にまったく同じ意匠のものが図示されている。他に、図替わりもあるという。

西五段目 三位 染付 磬

寺院にある磬の形を取ったもので、小振りで棧蓋である。図柄は中央に花を持つ唐草紋となっている。

西五段目 四位 染付 蛤

極小で蛤形。甲に海老と、斑紋や草紋が配されている。

西五段目 五位 染付 一輪梅

小形で、甲に一輪梅が描かれていて、胴も梅形をなしている。蛤とともに極小ゆえに茶箱などに組み入れるにふさわしく思える。

西五段目 六位 染付 鎗ノ鞘

古書のいずれにも例を見ず、形容、図柄とも不明である。

西五段目 七位 染付 冠

唐冠の形を意匠したもので大中小三通りほどある。一説に「小を上とする」とあるが、今日では中がむしろ喜ばれているようである。図柄は前側は曲面似合わせて縞筋が引かれ、背面は杵筋だけのものと、凸形筋入りのものとある。

西五段目 八位 染付 靈芝

この靈芝は万年茸といわれる如意形のもをいうのではなく、「荔枝」と書かれる一種の木の実の形から意匠されたものである。すなわち荔枝とは、中国では福建、広東、四川の三省にのみ産する植物で、楊貴妃がその実を好んだということでいよいよ有名になったのである。そしてその実は殻を除くと中に赤い肉があってブドウのような味がするという。この香合はその外形のまま写した

もののようで、斑紋と異様な角のようなものも現物通りなどである。それだけに香合としても珍種ということが出来る。

西五段目 九位 染付 二匹鯉

これも珍形で、一匹の魚を背開きにしたとき意匠で、片方は魚の絵をそのまま描き、もう一方は白無地のままである。これを数寄者が「二匹鯉」と名付けたわけで、銘によって一段と風流味を増したものといえよう。

西五段目 十位 イナホウキトモ云 染付 車軸

車軸を連想するのでその名のあるのはいうまでもないが、イナホウキというのは今一つ定かでない。一説に稲塚のことではないかともいう。いずれにしても身、蓋とも車軸形で、甲の平面と肩面には草花が描かれ、合口の面は身、蓋とも唐草紋となっている。総じて小振りで、小じんまりしている。

西五段目 十一位 染付 鶏

『香合真図』貞の巻にその図示があるが、鶏の姿のままを造形している。それぞれ多少の相違が見られるのであるが、特異なもので尾が身の方につき、そのまま伸びて床にまでついているという形で、頭も真つ直ぐ上に伸びて鶏冠が高く立っている。これに対し『香合真図』の絵図や、『京美図鑑』にある二例はいずれも背が低く、羽根は蓋の方に付随している。

西五段目 十二位 染付 竹ノ節

竹の根節を寸切にした形で、通常撮みも笹となっていてその先に葉が何枚か付、蓋の甲を飾っている。そして同じ甲の面には、蝶が配されており、胴側の方は節毎に鬚根を切落とした痕を思わせる点線が巡っている。節は上下端を入れると四つ節で、胴側にも笹の絵のあるものが多い。なお、例外として甲の撮みが宝珠形のものや、撮みがなく、山水絵になっているものも見られる。

西五段目 十三位 染付 ひよこ

鶏のひよこをそのまま形造ったもので、いかにも可愛げな意匠のものである。顔がはっきりと描かれ、羽毛が染付で丹念に描写されている、身の方には胸毛と足が描き込まれている。羽根は念入りのものと略なものがあるが、いずれも眼が大振りでぱっちりとしている。

西五段目 十四位 染付 寸切

寸切は円筒形を輪切りにした形で胴合となっている。この形は祥瑞にも見られ、東五段目九位に位置している。遺例がすくなく、図柄などは明らかではない。

西五段目 十五位 染付 鯉桶

昔、鯉を運ぶための塗の桶があつて、その形は楕円で、四方に持つ手がついている。茶器としては、常叟好に塗水指があるが、形物染付としては『香合真図』貞の巻にその写生があり、小判形棧蓋四足付で、甲に草花が描かれている。

西五段目 十六位 染付 桐ノトウ

小振りで五三の桐をそのまま伏せて香合の形としたもので、蓋は棧蓋である。そして甲形に合わせて五三の桐が描かれ、花卉は陰陽をなしている。

西五段目 十七位 染付 笹蟹

特異な姿をしている。すなわち身蓋とも小判形であるが、蓋の方が窄まり、ヤロウ蓋となっている。蓋の甲には眼に当たるらしい粒状の隆起が二つ相對し、他には、笹の枝が伸びて二ヶ所にそれぞれ五葉を付けている。斑紋はあるものとなないものがある。面白いのは胴の側面で、蟹の足と鋏が描かれ、足は左右から出て調度点前から見ると蟹が獲物を狙うがごとき姿を連想させるのである。

西五段目 十八位 染付 房

その姿が房の形に似ていることで、その名がある。ただし、本来の姿がなんであつたかは不明。見立銘のようにも思われる。他に、丸橋杭と呼ばれるものに酷似した形のものがあるが、この方も本のもとは判然としない。すなわち円筒形の裾が少し張り出し、蓋は一文字の棧蓋で、小さな不等辺三角形の板が撮みとなっている。丸橋杭とは、この撮みが違う程度である。絵は甲に花紋と七宝紋、胴に草または木が描かれていて、これになにやら昆虫が配されている。

西五段目 十九位 染付 昇り亀

『京美図鑑』で「登り亀」としてこの容姿のものが載せられている。加藤氏も解説の中で、これと同じものが『香合真図』の中に「塗桶」と題されていることから、必ずしも「登り亀」とは決め兼ねるとのべられており、問題を後に

残している。頂上が宝珠形をなす円筒形で、身蓋とも立浪中に亀が居て、ともに登りゆく姿であることから呼称と結びつくものであると思われるのである。

西五段目 二十位 染付 蛙

蛙のうずくまる姿をそのまま象ったもので、極小ながらまことに愛玩の妙器という印象を持っている。絵付けは、描線で蛙の輪郭を取り、背面に吹墨を施している。そして眼の描写が実に生き生きとしているのである。

西五段目 二十一位 染付 駅路

別名掛絡ともいい、輪形の中央の抜けた形をいう。これは。駅路を結ぶ馬の、鈴に由来しており、もう一つは僧侶の袈裟に用いられる象牙の輪とも結びつくのである。要するにドーナツ状のものを中空にし、これを真横に割った形で、『香合真図』には草花に蝶絵、『京美図鑑』には竹の絵のものがそれぞれ掲げられている。

西五段目 二十二位 染付 誰が袖

時代屏風などに見られる誰が袖形（着物をたたんで衣桁にかけた形）を意匠した平香合で、ヤロウ蓋である。角はすべて丸味を帯び、衣装の柔らかさを表現している。上部と袖の先に当たる部分が藍溜になっており、上部に梅鉢抜き、先は浪紋となっている。興味深いのは白地の部分になにやら文字のようなものが見られることで、これは、他の作品例にも記されている。

西五段目 二十三位 大小有 染付 長角

四つ足の長角棧蓋の箱形で、いくらか下の方が窄んでいる。甲は草花紋が多く、蓮の絵などが描かれている。側面は短い方が七宝紋、長い方が草紋となっており、頭註通り大小がある。また足のないものも見られる。

西五段目 二十四位 大小有 染付 角

四方箱形で棧蓋とヤロウ蓋とがあり、足もあるものとなないものがある。これも頭註通り大小があり、絵もまた様々である。見聞のものでは草花紋、雲鶴紋、人物紋などが挙げられる。

西五段目 二十五位 染付 丸橋杭

「房」のところで触れたごとく、房に似た形で、撮みが三本柱で三角錐状に

寄った形のものを『京美図鑑』では揚げられている。ただし、その根拠は今一つ明確でなく、今後の好材料の出現が待たれるのである。

西五段目 二十六位 染付 鞠

蹴鞠の鞠に似た形のことをいうと思われるが、古書にも絵図はなく、確証のある現物とも出会っていない。ただ注目されるのは「葛籠」として掲載した一つに「鞠」の伝承があることで、あるいはこれを鞠とするならば、葛籠は角形のみということになるかも知れない。

西五段目 二十七位 染付 壺

『京美図鑑』に一例を挙げているが、『香合真図』や『茶器名物図集』には、その例を見ないので形物としての定形がどのようなものか、今一つ判然としない。

行司 勸進元

頭取 番付外

行司 直齋好 名取川

武者小路千家、第四世直齋の好み。東北仙台、名取川より出る埋れ木で作られたのでその名がある。この埋れ木は、仙台藩主伊達家より宮中へ献納されたものを、九条家を通じて直齋が下賜されたもので、これを材料に五つ半（六つ目は蓋のみ埋れ木）作られた。形は長角で合口は身蓋とも錫縁となり、身の内側に波模様を蒔絵し、他は、木地のままで、蓋裏に直齋直書で「名取河」の文字が見られる。その波紋は細い線で大和絵風に美しく描かれていて、茶匠好の香合を代表するにふさわしいものがある。金沢、能久家伝来したものなどが知られる。

行司 庸軒好 回也

藤村庸軒（一一六―一三〇九九）が、小振りの丸形の瓢を以て好んだ香合で、現在数個が知られている。「回也」の名は論語から出ており、顔回が常に一瓢の飲に甘んじていたことを「賢ナル哉回也」と称賛した故事を引いて、瓢に因んでこの香合の呼称にしたのである。瓢の表面には身、蓋にかけて土佐光起（光成、素軒もあり）が瓢の花と葉を胡粉と緑青の置上げで描き、庸軒が直書と箱

書を行っている。

行司 庸軒好 標有梅

庸軒好の香合として「回也」とともに著名なのがこの「標有梅」である。その名は「詩経」に出典しており、こぼれ梅を意味している。すなわち槐の木地を材とし、白粉解形でその甲に梅鉢紋大小七つを散らして蒔絵しているのである。庸軒晩年の好みで、門下の山本退庵、北村幽庵にもその模作が見られる。

行司 黄瀬戸 根太

この欄二段に和陶の中から代表的なものを抜粋し、揭示している。しかも、各陶の中でもっとも人気のある形のものが選ばれており、それぞれ数点が現存している。

まず、黄瀬戸「根太」であるが、根太とは元来にきびのような出来物に名を発しているが、黄瀬戸の場合では宝珠とも共通するが、狭義では円錐形の香のものを指し、平宝珠ともいう。黄瀬戸の特徴である、柔い油揚げで明るい黄色の発色が見られ、これに濃いタンパンと褐色のコゲが現出しているものが上位とされ、古来その評価は極めて高いのである。東西に著名なものが六、七点を数えるに過ぎない

頭取 伊賀 伽藍

伽藍といえば、伊賀の代表的形式であるが、その型には多少の相違が見られる。すなわち四方切餅形の甲に円座の盛りあがりがあるものを標準とするのであるが、円座のないもの、円形のものなど各種におよんでいる。問題は製作年代で、桃山に発するというが、江戸初期が上限のようで、以後近代におよんでいるため、その判別が肝心である。それにしても頭取の上段中央を占めていることは、当時相当の評価を得ていたことが想像されるのである。

頭取 志野 宝珠

これもまた、その形容はさまざまで、かなり変形したものも志野の場合は宝珠と呼んでいる。つまり、造形のとくにその形にあまりこだわっていないわけで、むしろ白釉の白さと柔らかさ、鉄絵の赤の発色の美しさなどに観点があるわけで、評価もここに定るといえるものである。関戸家伝来のものが代表として

知られている。この他、志野香合では、辻堂、茄子、一文字に優品がいくつか見られるのである。

頭取 織部 菊兜

惣青の織部で、いわゆる兜形をなし、これに力強い線彫で放射状に模様がつけられて、これが菊花を連想することから「菊兜」の名が生まれたものと思われる。中京に織部釉の発色がよく造形が雄勁なものが知られ、菊兜中のお職といわれている。同類は数が少なく、それぞれ少しずつ形容を異にしている。

頭取 織部 青分銅

これも惣青で、胴がくびれて分銅形を成したものをいうのである。筋兜よりは数が多いが、時代のさがるものも少なくないので鑑定を要とする。代表するものとして、甲に梅鉢紋が陰陽に抜いてあるのが注目される。この他、織部では鴻池の入札に出た串団子絵のものが人口に膾炙している。

頭取 仁清 雁

仁清作の香合は実に多種多様で、それぞれ優作を生んでいるわけであるが、番付で敢えて雁を選んだのは、やはりその造形の美を評価したからであろう。元来、この動物を焼物で造ることは非常にむつかしく、しかもその体形をみごとに表現し得ているのは、仁清以外にはないといって過言ではなかるう。この雁を見ても、その首から胴へかけての曲線はまったく他の追隨を許さぬものがあり、実によく動物の実体を掴んでいるものと感嘆するばかりである。敢えて極彩色に目を奪われなかった番付の編者に改めて敬意を表する次第である。ついでながら仁清動物香合の代表作を掲げると鶴、鴛鴦、鶏、翡翠、雀、犬張子、兎などでいずれもその技巧を存分に発揮しているのである。

頭取 乾山 鎗梅

光琳の弟乾山は、仁清と違って、中年から製陶に入っただけに技巧より意匠で勝負している。その成功作の一つがこの鎗梅である。琳派の得意とする梅花のずばえを鎗梅と称して香合に採り入れたわけで、盛りあがる器面に巧にこれを配置し、その名とともに茶匠間の好評を得たのである。その数は現在五個前後と思われるが、鉄一色で梅枝を描いたものと、白泥釉を交えた二色のものと

があり、後者を代表とするものに畠山、藤田両美術館の蔵品が挙げられる。

勸進元 紅毛 白雁

この欄では呉州台牛を中央に左右に紅毛を配し、要するに異色の唐物を揚げたことになる。紅毛「白雁」はまさしく異色で、恐らく彼の地では白鳥を象った化粧品容器でなかったかと思われるのであるが、優美な中に異国情緒が漲り、これを探り入れた茶匠のセンスに感心させられるのである。現在四点が知られており、藤田美術館を筆頭に、金沢に二点、名古屋に一点が世に現れているに過ぎなく、彩色は白地に嘴と足先が赤で塗られ、足先には萌黄も交じっている。首輪もあるものとなないものがある。

勸進元 呉州 臺牛

白無地の呉州で、形は交趾の台牛とまったく同一であり、これまた、産地の隣接を知るよい材料となっている。いずれにしてもこの白呉州は位高く、遠州蔵帳、雲州蔵帳の両方に名を列ね、古くよりの珍重ぶりがうかがわれる。問題は『古今名物類集』にある「呉州青磁牛」に次いで、これは恐らく白呉州の表面にうっすらと水釉が溜まって、影青のように淡い青磁色を呈したからその名が起ったのではないかと思われ、もしそうであれば、これも当然この欄の代表作の一つということになる。

勸進元 紅毛 菱

『香合真図』には「阿蘭菱」と題し、甲に鳳凰の絵のあるものが図示されており、色は染付一色である。註に「珍しく一ッ物と云北三井」と記されている。また『京美図鑑』には姫路、酒井家の旧蔵で甲に麒麟の絵のものが所載されているが、ともに撫菱形のヤロウ蓋で、腰が窄まり、底は菱形の高台をなしている。原形は万暦あたりの中国のものようであるが、香合としては日本注文の色が濃い。なお、二つとも腰面に甲と同じ動物が配されていて、これまた、同じように花紋や唐草紋で掩われているのである。藍の色は紅毛独特のコバルトで、茶味がいっそう深い。

差添 南蛮 飯椀形

南蛮は水指や建水、灰器などに多く見るところであるが、香合は稀である。この飯椀形も『京美図鑑』に一点掲載されているが、形は文字通り飯椀形で、これに半ネラの掬い蓋が合わされている。

差添 寧波染付 向海老ハシキ付

独特の造形で、上から見ると一種の袋形で、絵は二匹の海老が向かい合い、これに藻草らしき草花があしらわれている。染付の色はやや黒味を帯びていて、中央にハジキの手がついている。寧波は産地ではなく、積出された貿易港の名で「ニンポー」とも発音される。産地は不明でいずれ景德鎮以外の中国南部の民窯であろう。

世話人

萬曆物	萩	存星	青貝
南青物	唐津	堆朱	ハシ力彫
御本物	丹波	堆黒	グリ
漢東物	信楽	独楽	琉球物
新渡物	備前	天河	鎌倉彫
楽焼代々	九谷	唐物柚	キンマ
好物			東山時代

錫縁

此外唐物

番付外

番付外 宋胡録 九角

宋胡録では柿（西前頭六枚目）と食籠（西二段目五位）の両種が番付に記載されている。この九角は広義で解釈すれば食籠に入れてよいわけであるが、雲集蔵帳の名物並之部に「宋胡録九角」と記されていることで、その名称を立て、番付外とした。この香合の特徴は、合いの艶やかさにあるといえよう。ともすれば力セ勝ちな宋胡録にあって、表面に風化が見られないばかりでなく、ガラ

又質の上釉が光沢を見せ、ところにより紫色の窯変をすら見せていることが、不昧侯がこの香合を交趾大亀・呉州牛などと同等に置いて愛玩された理由であったと考えられるのである。

番付外 呉州赤絵 菊兎

呉州赤絵では四方入（西最上段前頭十枚目）の頭註に「兎上手」とあって、兎の絵のあるものが上位とされ、赤玉（西二段目二十一位）でも兎の絵のものは珍重されている。この菊兎は菊輪花の合子形の甲に、その兎の絵が描かれていて、名称の由来をなしているのであるが、やはり呉州赤絵としても頗る上手である。形式も、藍呉州の菊蟹（西関脇）と相通ずるものがあり、番付外ながら格別好評を得ているのである。数も少なく、同類三、四点を知るのみである。兎の絵は白抜きと赤塗があり、中でも不昧侯所持のものは白抜きで銘を「裾野」といい著名である。

番付外 染付 結文

番付中「玉章」（西三段目十九位）の項でのべたごとく、結文中結び目のないもの（実は結び目が片寄っていて小振りなもの）を玉章とするという定義に基づき、この結び目が中央にあって、はっきりと、これが塗り分けられている手のもの（大小あり）は番付外に掲載した次第である。なお、『茶器名物図集』には「結文」の項に、この結文と、玉章と一緒に図示されているが、また、別に玉章だけが図示されていることで、やはり結文はこの形のもののみをいうことにしてよいと思われる。図柄は中央結び目に当たる部分に山水人物図が描かれ、左右の結ばれていない部分は藍のベタ塗りとなっているものが多いが、他の図柄もあり、形はいずれも左右ほぼ相称である。側面は胴合で、七宝と点紋が適宜配されている。なお、同形で結び目に区切りがなく、全面に三人の高士を描いたものが『京美図鑑』に掲げられている。

番付外 染付 竹の子

片面のみ反りを見せる竹の子形で、中程に節に当たる浮筋がある。絵も豎になっっていて、上部に花の折枝、下部に苦舟が描かれている。厚みはないがヤロウ蓋になっっていて、身の方も裾が丸く舟底形を呈している。数はあまり多くな

いが、和物で京焼にこの形が見られることは興味深く、やはり日本意匠であることがよくうかがわれる。

番付外 染付 火焰牛

六角胴合の甲に、牛が火焰を伴って、山の上を飛行している。番付では「櫻川」(西二段目十六位)「櫻牛」(同十七位)がよく似た意匠を見せているが、これらは花散らし紋を伴っており、素地・絵付ともやや性質を異にしている。甲も右の二点は平面であるが、この「火焰牛」の方は少し盛りあがっている。胴側には卍紋が各面に一つずつ配されている。なお『京美図鑑』にも一点掲載されており、この方は胴の文様が卍と雲が交互に描かれている。

番付外 染付 六角花莊子

前項の「火焰牛」と素地・形容を共通するものであるが、やや小振りで、絵が注目される。すなわち甲の中央に蝶がいて、六角の角に簡単な草紋が描かれており、蝶を取り囲んでいる。胴は背が高く、胴側にこれまた、六面の各面、一つ置きに蝶と草紋があって、花莊子の由来を見せている。蓋は胴合でなく棧蓋で、その分、身の方の背が高くなっている。なお、『香合真図』には「六角蝶」として同類が掲げられている。

番付外 染付 六角鳥

番付外の場合は名称を出来るだけ箱書に依ることになっているが、この香合の場合、箱に「染付鳥 六角」とあることで一応「六角鳥」と呼ぶことにした。意匠は六角胴合の張甲蓋の上に、鳥が一羽貼付られており、誠に個性的で、寸法が小振りだけに愛玩の器としても好ましい。染付のあがりもよく、甲に草花、胴に傾斜する草紋が手際よく描込まれている。

番付外 染付 一葉隅田川

番付の「隅田川」(西四段目十四位)とまったく図柄を一にするものが、文字通り形替わりで、一葉の形式を取っている。すなわち一葉の甲に、ハジキが伴い、上の柳の垂れ枝、下に苦舟が描かれていて、絵がまったく隅田川と同一であるとともに質的にも一致するものが見られる。隅田川の変形としては寧波染付の向海老と同形のものや、隅田川の形のままで絵のないものも知られる。

番付外 染付 栄螺

番付の「立唄」(西三段目三位)とよく似ているが、一廻り大きく、蓋がまったく違っており、中程が凹んでいて、栄螺の通りに造られている。胴はやや傾き、甲と、裾が藍溜となっており、その間の白い部分に群点紋が適宜配されている。

番付外 染付 八角ハジキ

撫八角で、甲は盛りあがり、身も裾つぼみで全体としては蜜柑を思わせる造形となっている。ハジキは甲の中程に小さめに付けられていて撮みの役を果たしている。珍しいのは、その絵付けにあり、図柄が葡萄の蔓で、実の部分が釉裏紅となっているのである。この釉裏紅は染付の他の器には時折見られるのであるが、形物香合には現れず、この番付外に漸くその例を見た次第である。

番付外 染付 牧童

番付外としても珍しい意匠のもので、交趾の「笠牛」に似た臥牛の、背中的一部分が蓋となり、これに豆男のごとき小人物が配されている。勿論、牧童を意味しているわけで、交趾笠牛が笠のみで牧童を現してるのと対照的である。そして、この香合の箱には「牧童」と記されていることからこれを呼称とした。その造形の面白さに加えて、惣瑠璃釉であることがこの香合を一層引き立てているといえよう。

番付外 染付 平宝珠月兔

平宝珠形は番付では「干綱」(西四段目十八位)が見られるのであるが、番付外としてこの月兔と、鳳凰絵を挙げることが出来る。いずれも甲の盛り方は市女笠風に波を打ち、ヤロウ蓋で、身は極浅く作られている。甲の絵は空高く三ヶ月が描かれ、これに配される地上の兎は、巧に吹墨の白抜きで描き出されている。この構図は和物で姫谷焼にみられることは誠に興味深い。

番付外 祥瑞 鳥瓢箪

瓢箪の上部が鳥の形をしており、祥瑞としても随分と意表を突いた意匠である。祥瑞の瓢箪では、番付中に「鳥差瓢箪」(三段目六位)が挙げられるが、性格的にはかなり相違が見られ、この鳥瓢箪の方は、遠州好の繊細な感覚と違っ

たものを見せている。数も少なく『京美図鑑』の一例の他、総数三、四点に止まるものと思われる。身の方には水鳥でなく地上を歩行する水かきのない鳥の足が左右に描き込まれている。なお『香合真図』貞の巻には「瓢箪鳥」として瓢箪形の蓋の摘みのみが鳥になったものが図示されているが、現物を見ることはない。

番付外 青磁 八角伽藍

八角棧蓋で甲に円座があり、伽藍の名の起こりとなっている。身の方は少し裾で細まり、別に高台が付いている。青磁の質としては、田楽箱（東二段目二十一位）や、角（東三段目二位）などと軌を一にしており、青磁として薄作である。なお、東二段目十八位に「六角」があるが、現物が判明せぬまま、これも近似のものと想像されるのである。

番付外 交趾 船

『香合真図』利の巻にこの船は図示されており、形物としても当然挙げられるべき類であるが、恐らく番付編成時に、たまたまこれに出合わなかったためと思われる。大振りで船体のみを象ったもので、蓋の側面には宝尽し、甲の中央は菱繫紋、前後は花の折枝、さらに身の側面には波紋がいずれも浮紋として描写されている。全体としては吉祥を求めた宝船を意図したものと思われ、惣黄であることもこの香合の評価を高めている。

番付外 交趾 瓜

瓜に類する交趾香合は数種におよぶのであるが、これは裾広がりであることで他にその例を見ないのである。襷の数も少ないだけに南瓜を思わせる造形であるが、これも確証を得ぬまま番付外に列することとした。色合いも良く、寸法も程よい好評の香合である。

終わりに上記以外の形外のことを数種別に列举する。

「交趾」麒麟（台牛と同型）・菊桶（合子形甲菊）・向菊（輪花合子形）・蟹・蜜柑・食籠

「呉州」藍呉州台牛・同鷹・玉章牛・玉取獅子（四方足付）・雲鶴（白呉州四方入角）・雀・菱鹿・水鳥・角

「青磁」茄子・兔・鶴・柚・菊輪花・梅形・獅子蓋・古雲鶴（高麗雲鶴青磁合子形）・獅子（南京青磁）

「祥瑞」笠（七宝透あるものも有）・瓢箪（鳥差瓢箪以外の瓢箪形）・藤の実・美之字透

「染付」花形・要目切扇（地紙形）・地紙（小形足付）・秤・ひよく鳥・（鴛鴦）・一葉ハジキ・一葉亀・柊（一葉形鳥摘）・虎・獅子・蟬・輪違・兜・州浜・剝蜜柑・台付（卵形）・雀・茶臼・梅花形・冠絵（塗桶形）

「その他」紅毛（四方入角・水鳥）・万暦赤絵（合子形・四方角切）・南蛮冬寒・絵御本（塗桶茄子絵・同花紋・四方蝶紋）（この内塗桶花紋と四方蝶紋は松平備前守正信侯好）・白高麗茗荷

「淡交社 形物香合より」